スプリング

13号

大手前高等学校自治会

そもそもスプリングの発行は、自治会員の厳粛な信託によるものであって、その権威は自治会員に由来し、その編集は自治会員の代表者が行ない、その恩恵は自治会員がこれを享受するのである。

これはスプリング普遍の原理であり、このスプリングはかかる原理にもとづくものである。これに反する一切の機関誌、その他は排除すべきものである。

そして自治会員は我校の名誉にかけ、この崇高なスプリングの理想へ全力をあげて邁進せんことを誓いつつ、ここに第十三号を発行する。

第13号　スプリング目次

・似顔　浦井二郎
・表紙　安里道子

一　自治会

☆本部役員……1
。「独白」……前期会長　西田竹志……1
。「これからの自治会」……後期会長　山崎芳彦……2
。「主観」……後期書記　石川正……3
。「剽窃・悪人」……前期二年学年代表・貝淵弘三……4
☆昭和四十七年度自治会活動を顧りみて……5
。自治会祭・文化祭……5
。水泳大会・体育大会……6
。コーラス大会・北野交歓……7
☆昭和四十八年度行事紹介……8

二　クラス紹介……全クラス……9

三　先生紹介……36
上総先生・黒川先生・中川先生・中塚先生
浜口先生・浜田先生・福島先生・伏見先生・松本先生
四　先生の回想記……45
○「赤い鉄」……杉野とし子……45
○「回想記」……平正人……46
五　クラブ紹介と体験……48
○空手道部、柔道部、登山部、ラグビー部
○音楽部、美術部、ブラスバンド同好会
六　修学旅行……55
○「修学旅行によせて」……佐野富士弥……55
○「新二年生・修学旅行」……片山龍夫……56
七　編集者雑感……平山栄一……57
木南敦……58

独白

前期会長　西田竹志

セブンスターの煙りが流れて行く。胸が悪くなるほど苦いコーヒーが舌を汚す。ベートベンの交響曲第三番「エロイカ」の曲が流れる。でも書けない。私に『自治会とは何ぞや』とか『これからの自治会に望む』なんて器用な文はおおよそ書けない。ソクラテスが言った『私は、自分が何も知らないということを知っている点に於いて他の人より、よく知っている。』と。あんな理論が通るなら私も言う『私は、自分が堕落していると知っている点に於いて他の人より、堕落していない。』と。高校生活も峠を越した—どちらが上りでどちらが下りかな？—今、何もかも冷え切った頭で正直に考えることは、今の高校（言い過ぎるなら今の大手前。言い過ぎでないなら今の教育体制）に自治会という組織なんでものは無用の長物となっているということだ。「自治会」という名前の大きな箱があって、その中にみんなが無理矢理押し込まれる。でも誰もその箱が「自治会」と名付けられてるなんて知らない。そこで執行部なんて物が出来て、いっしょうけんめい理屈を付けて、これが「自治会」と名付けられた箱なんだと絶叫する。教師も言う「自治意識を目ざめさせるという教育をする所が自治会だ。」

今度は、ハイライトの煙りが流れて行く。あのウェイトレスさんのスカートは短かすぎやしないだろうか。やっぱり、私にはきれいな文章が書けない。前年度の後期の会長はいいこと言ってたな。「共同共感体」か。そうだ、さっき私は自治会は不要だって書いたな。この理論を発展させるときれいな文章になりそうだ。今の虚構の自治会組織なんて根本からぶっ壊せばいいんだ。与えられた自治意識なんて糞くらえだ。前期は行事に追われ、後期は問題を必死になって探り出そうとする執行部。何か刺激を求めながらも平穏無事を祈る自治会会員たちの作っている、いやかってに出来あがっている自治会の組織。ああ、だいぶん波に乗ってきた。批判の文はなんて書き易いんだろう。でも、これはこの辺りでやめておいて、少し本腰を入れて書いてみようか。なんて言ったって四ケ月も会長なんて職についていたんだから、ちょっとしかめっつらしい文章を書かなくては歴代の会長に悪いからな。でも、きれい事を並べたって血にも肉にもならないから具体的な事を書こう。私が実際、執行部というものに入って何がほしかったかというと、H・R・—時間割でひとつだけ飛び出しているやつ—と組織化された自治会であった。前者は、みんなの意見を聞くために、後者は、執行部がしたい事が出来るように。しかし、前者は学校がしっかり握ってるし、後者はお役所みたいに給料制ぐらいにしなければ不可能だろう。H・Rは授業だなんて学校当局は言いながら、現在のようなチャランポランなまま放っておくなら、いっそのこと自治会にくれればいいのに。本腰を入れて書こうと言ったけれど、やはり白けてきた。しかし、これも当然だろう。うその上にうそを塗っても、やはりそれもうそであるように今の教育体制、もっと人間自身を変革しなければ、今の自治会に何を塗ってもそれはきれい事にすぎない。

またピースの煙りが流れて行き、曲は「悲愴」に変わっていた。

＊　＊　＊
＊　＊　＊

これからの自治会

後期会長　山崎芳彦

後期本部が執行して、はや一ケ月半過ぎました。そしてこの期間に、多くの問題に携わりましたが、なぜか、どこかで厚い壁にぶち当りました。

このぼくに、強度の恐怖感を与えるその壁は、このぼくにとってあまりにも厚すぎると思うのです。あまつさえ本部が打ち破れないのに、どうしてぼく一人で打ち破れるでしょうか。この厚い壁の排除なくして自治会の問題解決は何一つないでしょう。この打倒「厚い壁」は現教育体制の中で第二の大手前生、第三の大手前生が生まれてくる間、自治会の絶対に避けられない問題だとぼくは思います。ここまで言えば、皆さんにも理解していただけると思いますが、この厚い壁こそ大手前生の最大の欠点でもあり又特徴なのです。一時、三無主義と言われていた時よりも、まだましだとはいえ、可能を不可能にもできる力は十分持っている。中には積極的に意見を出す人がいますが―もし、こんな人ばかりならなァ―とその人を見ながら思うのです。でも、ぼくは知っているんです、どうして三無主義に浸るのか。このぼくも、やっぱり大手前生だからです。しかし、ぼくは、こんな事では駄目だと思ったんです。毎日毎日、何の苦労も知らず、ただ温室に入れられた花のように、勉強するだけ。こんなことでは駄目だと思うんです。そんな利己主義を振り回していては、駄目なんだ！ぼくはなにも、学校を改革するとは言っていないんです。すべてが、自分自身に関係していることで、けっして目をつぶり、見過ごすことはできないという事を言いたいんです。

本部はいろんな問題を考えています。そして多くの案を練り出します。けれど、その時点では本部は施行できません。必ず代表会議に提案し、各ＨＲで討論してもらい、自治会会員の承認・決定が必要なのです。

この時に際して、いろんな議事進行のテクニックがあります。例えば、本部が一方的に方針を打ち出し、反対意見がなければその方向に進むということです。しかし、ぼくはこの方法では、本部が自治会会員の現状につけ込んで、あきらめ切って、自治会会員を無視した形となり、はたまた、独裁的になりかねないと思います。ぼくは、民主的に議事を進めて行きたいのです。千二百人の会員をどうして無視できるでしょうか。一方、会員側では、こういう形に馴れきってしまっていると思うのです。自治会会員の存在とは、もっと強いものだとぼくは思います。

本部と会員の間は、あまりにかけ離れているように言われがちです。けっしてそうではないことは、本部役員は君の隣に坐っている者であり、本部室はあなたの教室の隣にあることからもはっきりとわかるじゃぁありませんか。本部と会員の連絡もたやすい事もありません。結局は、いままで話してきた「厚い壁」にさえぎられているのではないでしょうか。

さあ皆さん、今こそ立ち上りましょう。今こそ！。一人が二人に、二人が四人に、四人が八人に！　ぼくは信じているんです。ぼくは待っているんです。ぼくは、皆さんとそろって歩みたいのです。全会員がそろえば、できない事はないんです。さあ皆さん、三無主義、利己主義という殻は脱ぎ捨てて、今こそ立ち上りましょう。

主　　観

後期書記　石　川　　正

今、自治会活動は決して活発とは言えない。其れにしても、代表会議における各学級代表の理論的な意見は誠に目を見はるものがある。しかし、自治会活動の目的は単に議論を進めることではない。よってここに、私個人の極主観的意見を理想論として掲げておこう。

『自治会会員は、正当に選挙された代表者を通じて行動し、我等と我等の後輩のために、活動に依る成果と、校内全体にわたって自治会活動のもたらす恵沢を確保するよう努めなければならない。

そもそも自治会活動は、自治会全会員の正当な権利であり、其の権威は自治会全会員に由来し、其の権力は其の代表者が此れを行使し、其の福利は、自治会全会員が此れを享受する。此れは、自治会活動普遍の原理で有り、此の活動内容はかかる原理に基くもので有る。我々は此れに反する一切の活動を排除し、健全な自治会活動を行なうように努めなくてはならない。

自治会会員は、意義の有る高校生活を念願し、人間相互の関係を支配する日々の生活を深く自覚し、自治会活動の活発化に信頼して、友人関係の正しい発展を期待せねばならない。我々は此の基本理念を維持し、自治会活動がより一層発展することを望む。

自治会会員は皆、自分のことのみに専念して他人を無視してはならないので有って、此れは民主社会に於いては普遍であり、此の法則に従うことは、自分の意志を貫き、他人との協同による成果を期待する人にとっては当然の責務で有ると信ずる。』

此れが私の理想の学校自治会体制の基本的な方針であります。此の方針を貫くには多くの問題があると思うのですが、其の問題を解決するのは決して本部だけではなく、其の本部を中心とする全体の盛り上りようと、其れによって導かれる正当な方針を適正な機関を通して行使することであると信ずる。つまり代表会議を必要なだけ開催して民主的に討論を重ねた上での決論を本部の行動の基本としなくてはならない。

今まで述べて来た事がお分りいただけたでしょうか。結論を申し上げますと『自治会本部は方針を掲げた一つの機関などでは決して無く、常に自治会会員多数の支持と意向の上にあるものである』と言う事である。つまり自治会本部の行動は、いかなる時にも会員多数の意向の上にたったものであるべきであり、何か事を推し進め、しかる後に否決されるような事を行なう事、つまり会員多数の意志に反する事を行なう事は決してあってはならないはずである。此の事は、決して自治会役員に立候補する人が意志を持ってはならないと言うものではない。意見のある者は会員に其の意見を説けばよい。そして会員が納得して後の採決こそ真の意志であり、自治会の本来の進むべき道であると考える。

最後に、此の文を最後まで読んでくださった人に感謝します。スプリングには面白い文が多いようなので、此のような文もまた異なった面白さがあると思います。

剽窃・悪人

前期二学年代表　貝　淵　弘　三

「悪人」。響きのよい言葉ですな。善人なぞと人様から言われると、くすぐったくていかんのですが、「こら、この悪党め」なぞとやじられると、何かこう、腹の底から自信が溢れてくるから不思議。その悪党も近頃はぐーんと数が減ってしもうたようですが、どうして、なかなかの豪傑もまだまだおりますぞ。某の悪友にも一人、一風変わった奴がおりましてな、今宵はその奴の「悪勇記」でも書いたろう思てますねん。……その男、名は麻呂、幼少の頃より弓馬の道に通じ、身の丈六尺余、胸幅一尺二寸という偉丈夫。タカのごとき鋭き目、鬚には金良の毛が燃えるようであった。怒って目をむけば、猛獣も忽ち倒れる程、然るに、一たび笑えば、赤子もなつく優心（ハテ、どこかで聞いたふうな）とまぁ、こんな具合の男であった。この男がである、修学旅行で引き起こした不始末というのがまた冴えておる、まぁ聞いて下され。……所、帰りのフェリーのデッキの上、我々クラスの悪の四天王が、いつものごとく肩をいからせ、東に仲睦まじきアベックあらば、近づきニンニク投げつけ、西に困った人あらば、急ぎ駆けつけはやしたて、てな具合で、何するあてもなくぶらついておったのですわ、すると、あら不思議、突然、いたいけなき乙女御が我等の前に現われ、ひた願い乞うたのだす。「麻呂様、どうか、かの姫君のもとへお越し下さい。」すると、さすが麻呂、動ぜず「フムどうしてもというならばいたしかたあるまい。諸兄よ如何いたそう。」答えて曰く「麻呂殿行かれい、乙女御のたっての願いじゃて」と揃って、内心嫉妬に悶えながら、苦しまぎれに言い放ったのであった。しかし、そこはそれ、男の子、表には出さず、さも友情に溢れるがごとく、麻呂、感きわまって「ありがたき御所存」なぞと嘘ぶき、ニヤケ立ち去ったのであった。して、そこはそれでおさまった。しかし、災難とは夜ふりかかるもの、ましてや、色の道は夜に限るて、という訳で時は夜、ふと、物音に目覚めると、麻呂が戸口から忍び足で出て行くのが見えたんですナ。ハテナと不思議に思い、某も周りの野郎をふんづけて後を追ったのですねん。（覚えがあろうが）すると、するとですぞ、どぎつくも麻呂は女と逢引しておったんですわ、そして、わしははからずもその女の顔を見てしもうた。「アッ大珍」わしは声を押し殺した。女は泣いておったのだ、麻呂の厳かな声が静かに響いた。「わしは、お前が好きじゃ、じゃが、お前と一緒になることはでけん、又その訳も言えん。」「何故、どうして、訳を教えて」「男の約束じゃ、女にはわからん」と、麻呂はすがりつく女を蹴っとばした。「アレー」そのときわしは心の中の小さな疑問につきあたった。日頃あれ程女好きの麻呂が、今宵はなんぞや、「フム」「アッ」わしははたと思いあたった。大珍はわしが心に決めた女、それを麻呂が知らぬはずない。ワシは敢然とした。麻呂スマヌ、わしは、気付かれんように、ようよう床に這い戻った。そして、薄目を開けて、戸口の方を見ていると、麻呂が戻って来るのが見えた。心なしか肩が震えているようだった。勿論わしは一晩眠れなかった。翌朝、わしは麻呂の顔をまともに見れんやった。一方麻呂は普段のまんま、それがわしには余計つらかった。しかし、この男は偉い。例のごとくまわりの女の子をからかいながら言ったものだ。「ヘッ女なんて、くだらないよ。」この男大物であるな——

自治会祭

大手前高校、独自の行事である自治会祭は、新一年生にとっては大手前校のバケの皮がはがされる行事でありまして、今年も例年どおり盛大に催されました。しかし、それまでに自治会祭規定七条、つまり「グループ、クラブを問わず、自治会本部への参加申込書には、学級担任または顧問の承認を必要とする。」の問題の収拾も結局はつきませんでした。

混乱と虚無感、そして清掃で終ったこのお祭。72年度、大手前独自のこのお祭をもう一度ふりかえってみましょう。

。千日前火事の影響か？二ノ八のゲーム室　「プレイタウン南」
。ブームの先端に立って演じた、二ノ五の時代劇「木枯らし紋次郎」
。卒倒者、死亡者、数十百人をだした一ノ三の「恐怖の迷路」
。童心にかえって、先生方も楽しんだ一ノ三の「ピンポンパン」
。累積赤字数億円を出し、ドルゲを怒らせた二ノ四、喫茶室　バロムⅠ
。復活して大いにうけた、三ノ一、仮想行列、火葬業烈　仮想凝裂……
。「カジノでもうけてラスベガスへ行こう」の歌い文句の一ノ八
。涙と感動の渦、冷や汗と下痢をもよおした、二ノ一の劇「白雪姫」
。名演奏のブラスバンド、ＮＨＫからの反応はどういう訳かなかった。
。マンネリでとおした、本部主催、綿菓子、古本市、ヨーヨー……

秋の文化祭よりも、盛大といわれるこの自治会祭、クラスの親睦を深める意味でも、大手前高校で最も重要な行事であるといっても過言ではない。この祭を、より有意義なものにする為には、みなさんの自覚と認識と積極的な協力を必要とするのです。来年度の自治会祭をよりすばらしいものであるように祈りつつ……。

文化祭

文化祭は、九月末か十月初めの日曜日と月曜日に、大手前の校内と日生球場の隣りにある青少年会館で開かれる。

初日は、校内で、クラス・クラブの展示が、講堂では、クラスの演劇や演芸会が、催される。日も暮れかかって来るころ、これら展示は、取り壊されて、教室は、いつもと変らぬようになる。やがて夕暮れ空に星が、二つ三つと輝くころ、校内に出て、大きなたきびに火をつけて、その回りを数重に取り囲んで、踊り歌う。これは、一時間以上も続き、終るころには、月は中天に輝き、星は空いっぱいに輝いている。

翌日は、青少年会館で、舞台行事を中心に、コーラス大会の決勝などが催される。コーラス大会は、一次、二次予選を勝ち抜いてきたクラスが、校内の覇を競う。九月中は、昼休みや放課後は、課題曲の歌声が、あちらこちらから聞えてくる。それだけに決勝ともなると、どのクラスもなかなかのものである。さて、二日目の舞台は、コーラス大会以外は、みなクラブの舞台である。各クラブとも、日ごろの練習の成果を披露して、真剣に演技しているのだろうが、見ていて、さすがはと思わせるのもあれば、あれではと思わせるものも中にはある。

以上、文化祭の内容のあらましを述べたが、文化祭の主役は、自治会であるが、パッシブな形で参加するか、アクティブな形でするかは、各個人の問題である。しかしながら、裏方の手があってはじめて文化祭が、成り立っていることは、銘記されたいことがらである。

47年度　水泳大会記録

25m	自由形	(男)	14″4	3—1	上山
		(女)	17″3	1—6	遠藤
	平泳	(男)	18″1	3—1	出口
		(女)	23″0	1—7	寿崎
	背泳	(男)	17″4	2—7	山崎
		(女)	20″7	1—7	吉宮
50m	自由形	(男)	33″0	3—4	越替
		(女)	39″0	2—8	上野
50m	平泳	(男)	38″8	3—8	白川
		(女)	50″0	1—9	鳥居
100m	自由形	(男)	1′09″0	3—3	金
100m	平泳	(男)	1′31″6	2—8	堅田
100m	リレー	(男)	59″2	3—3	
150m	メドレー	(男)	1′50″6	2—8	
100m	メドレー	(女)	1′30″6	1—2	
200m	混合リレー	(男女)	2′18″8	3—2	

47年度　体育大会記録

100m	(男)	12″2	1—4	島崎
	(女)	14″3	3—5	森田
200m	(男)	26″5	2—4	森本
	(女)	31″5	2—6	吉井
混合リレー	(男女)	2′55″9	2—4	
400mリレー	(女)	1′03″1	2—1	
800mリレー	(男)	1′49″7	3—2	

毎年毎年、体育委員が困ることは、水泳大会の出場選手を決める時である。どういうわけか、気品さ（？）あふれる大手前生は、少数の実力派並びうれしがり屋派を除いて出場したがらないのである。キケンが続出し、又出る人は同じ、と全く校内スポーツ大会の精神に反する結果となる。

その点、体育大会の方は、どのクラスも意気盛んとなる。今年は応援合戦もなく大会前はどうなることかと心配されていたが、なんのなんの、各クラス旗を作ったり、きちがいじみた色のハチマキをしめたりと、たいんなものであった。果は〝三三十七拍子〟というハデというかマヌケというか、そんな手拍子もでたとか。

体育大会でも印象に残っていることは、西田前会長のあいさつの中にあったまじない文句で「雨さん雨さん降らないで！」彼は我々全生徒にこの文句を三度も言わせたのである。しかしそのかいあってか、雨さんは午前中にパラリッと一度降っただけに終わったが。

とにかく、水泳大会も体育大会も、心に楽しい想いでを残してくれる。たとえそれがどんなに小さくともネ……

コーラス大会

決勝結果　課題曲「海に来たれ」

順位　学年・組

一位　三年一・四・七組　自由曲「我が悩み知り給う」

二位　二年五組　〃　「木曽節」

三位　三年二・五・八組　〃　「あんたがたどこさ」

昭和四十七年度のコーラス大会は、九月十八・九日に一次予選、九月二十七日に二次予選、そして十月二日に決勝がそれぞれ開催された。

一次予選は、二日に分かれて行なわれ、全学級が、課題曲を歌い、上位十二学級が、一次予選を通過した。なお、三年は、男女の構成比の違いがあるために、三学級ずつ合同で参加したが、人数の点で、一・二年にまさるので、再考が必要でろう。

二次予選からは、自由曲も、歌うことになっている。自由曲は、日本の民謡を選んでいる学級が、多いことが、目についた。上位七学級が、決勝進出が、決定した。なお、一・二次予選は、本校講堂で開催された。

決勝は、文化祭第二日、青少年会館で開催された。決勝に残った学級は三年三組、二年三組、一年一組となっているが、二年が、三年優勢の中、二位に食い込んだことは、注目される。

═一九七二年　北野交歓═

＜北野会場＞

大手前の数倍あるようなグラウンドでくりひろげられる試合の数々男女子バレーボール、男子走り高跳び、巾跳び、クラブ対抗戦、職員ソフトボール……。バレーボールについては、残念ながら、相手（北野高）の攻撃が冴えに冴え、少し旗色が悪かったですが、走り高跳び・巾跳びではみごと大手前生が優勝を果たしました。しかしながら、なんといっても最大のよびものは職員によるソフトボール、試合のすんだ人が順々に集まり、また、投より打がまさり、守もそこそこ？でランニングホームランも出る試合で、進むたび応援の渦はふえていき、さながら工事現場のようでした。

＜大手前会場＞

北野高校の強豪たちがぞくぞくと大手前高校の門をくぐってやって来た。ここ数年、北野高校に負けがこんでいるため、今年こそ、と我軍の選手の面々は気合十分。校庭ではバレーコートを七面、砂場では、ハイジャンプ、バレーボールでは、両校の女生徒の黄色い声の中で、たれぎみのネットをはさんで両者、必死になってボールにしがみついていた。体育館では、両校の先生同志のバレーボール試合。頭でレシーブしたり、顔でパスしたり、妙技、珍技、神技の続出、館内われんばかりの声援と爆笑。最後に両校バレーボール部の模範試合、普段の実力も出しきれず、惜くも（実感）涙をのんだ。結局、今年の交歓試合も北野高校に軍配があったようで、やはり大手前、元女学校の影響でしょうか、運動では（も）ダメでした。来年こそは……

昭和四十八年度行事紹介

。三　月

＊入学試験…まずは合格おめでとう。今が一番楽しいときですね。
あとは……

。四　月

＊入学式…すれちがう上級生の顔を見て下さい。一・二年後のあなたがいます。（一年たつと　こんな顔になるのか?!）

＊クラブ紹介…よく聞いて慎重に。（三月からやる人もいます）

＊自治会役員選挙…たまには複数候補による選挙をしたいもの。

＊校外教授…楽しい遠足。行先はクラスで自由に話し合って。

。五　月

＊中間考査…来るべきものがやってまいりました。アア！（なげき）

。六　月

＊北野交歓…一般（？）生徒にとって貴重な対外試合。連敗に終止符を！

＊自治会祭…みんなのバケの皮もはがれるころ。大いに騒ごう。

。七　月

＊期末考査…一週間の長丁場、ムリをすると休みにさしつかえる。

＊水泳訓練…何もいうことなし、ただ生き抜くのみ。

。八　月

＊臨海登山…老いも若き（我々）太陽に親しもう。（グラグラです）

。九　月

＊水泳大会…あまり興奮して観覧席から落ちないように。

＊自治会役員選挙…そろそろ自治会にも慣れてきたはず。一年生諸君の健闘を期待する。

＊体育大会…ここが腕（足？）の見せどころ。応援合戦も見もの。（どこのクラスにも変わったヤツがいる。）

＊コーラス大会…クラスの団結と練習量がものをいう。

。十　月

＊文化祭…展示・演技にも積極的に参加しよう。（ファイヤーもあることだし…これしかないのかな？）

。十一月

＊校内球技大会…蓄積したエネルギーが爆発する。（プロレスを見まちがうばかりの試合もある）……一学期・三学期にもあります。

。十二月…ストーブの使用には細心の注意を！（主に家庭科調理実習に）

＊期末考査…ムリしてかぜをひかぬよう。

。一　月

＊アチーブ……（九月もあります）

＊耐寒訓練…大阪城の外堀1・2周、何とかなります。（行ったまま帰ってこなかった女子ありけり）……ウソダ。

＊卒業式…巣立つ者、見送る者、悲喚交々。

＊野沢スキー講習会…こういう行事が大手前のエエところであります

クラス紹介

一年一組

只今、これを書くにあたって一組のCMを考えている次第であるが、何をかくそう、ホメ言葉ばかりがわいてくるのである。（横の奴も同感とばかりにうなづいておる。いや、まったくまったく）そして、クラス四十五人のばらいえてえ（バラエティ？）に富む性格をどう書いたらよいか、考えているのである。しかし、そこは一年の強み！一年といふカクレミノで書きたいことを書く。何せ、一年ですから。（この言葉、二三年には脅威であろう。あと一学期間使用可能保証）

さてさて、クラスのハイライトをまず上げていこう。第一番目は何といってもクラス内の親睦を深める役目を果したということでクラス内の有力紙「カワラ版授業中」の発行である。まったく奇々怪々なる文体（発行者はドウモ阿呆らしいのだ。）を持って発行回数は十回に及んだ。これはクラス内のプライバシー暴露から流行語特集、果ては「幾何テスト問題傾向と対策」「後期HR委員選挙予想」まで豊富に記事を集めたものであったが、それの面白さは読んだ者の顔をひきつらせ、正確さと速報性は心に深い傷跡を残させるほどのものであった。（ウソもこれだけ書くとホントになる?!）

第二のハイライトは男子バレー準優勝、女子バスケット優勝というゼイタクをやってのけたことである。それに体育大会ではリズム運動の鬼が出現、午前中は校内首位を守った。（午後からを聞くのはタブーでございます。）これらは老若男女の素晴しきチームワークの成果であるのだ。（いや同感、同感。）第三ハイライトには勉強の事を、と思いましたが一組にはふさわしくない？ということで流行語とギャグの蔓延について一言。流行語ベストはちを上げると「ガンチャンは色事師」「チャート・チャート」（Vサインをしながら）「ド忘れしました。」「定義はない」「マア、エエカ」「死んでしまえばいい。」「一発勝負」「鬼！」といった順。この頃は去年も書かれていたものでここらでやめましょう。第四のハイライト（クラスの異様な雰囲気）。テスト前でもあまりアワテナイ。（悟りですよ。これは）そして帰校時間も平常と変わらない。終了のベルがなると無人になるインケンなクラスとはちがって当クラスはヒューマニティを尊重しております。クラス内の意見では、これは遠き地中海につき出る伊太利亜の古き文芸復興の精神を受け継いでいるとか。

〔総括〕（インタビューと祝電）

「トニカク、これほどヒューマニティに富むクラスはない。まるで地上の楽園と思わせます。はい、時間が来ました。次週の作品を紹介しましょう。」（映画評論家淀川長治サン）

「高校なら大手前、大手前なら一年一組。」（全国中学三年生受験者一同）

「トテモ、やりやすいクラスです?!」（大手前教員一同）

「このクラスまるで一―一みたい。」（一―一が誇るギャグの帝王）

「地学をここ数年とっている人いないんです。」（S先生）

「巨人は強い。」（一年一組一同よりH先生へ）

さてこれから波乱万丈の人生の海めざして一組の勇士たちはいかなる事に……?。乞う御期待。つづく。次週をお楽しみに！

クラス紹介

一年二組

スタンバイ、OK。まいりまぁす。

そもそもの始まりは、一週間にして早弁をはじめた乙女たち。そして、電車のなかで、ゴミを丸めてバレーボール、電車を降りては、走りまわる姿の、制服はさかさま、ナップザックは前、川のウオを見て叫ぶ言葉は、シロナガスクジラ！　アイスクリームなめてたのはだれ？　狂いに狂った春の遠足。そしてそして、ノリまくった自治会祭、金蘭会館という場所のハンディのため、見た人は少なかったが、他のクラスにゃまねできぬ、全キャスト男性の、かの『シンデレラ姫』。王子はいつしか玉子になり、シンデレラはいつしか珍デレラ、ほお紅、口紅、ロングスカート、ラストは『天国と地獄』で、舞台の上はラインダンス、ああ。次にひかえし球技大会。六人の勇者は大活躍。実にきまった、元バレーボール部員、玉子様ことT君のスパイクで、みごと全校優勝決定。それだけではありませぬ、九月のはじめの水泳大会。女子メドレーは優勝！OK。それを聞いてとびあがったオリンピックぼけもいたとか、いないとか。とにかく記録は今回からなので優勝イコールOR（オオテマエ・レコード）。それに体育祭。スポーツの2組の異名が聞かれる。話は戻るが、水泳大会の四日後はアチーブ。開放されたのは夏休み、できなかったはアチーブ・テスト。担任ぼやく生徒ニンマリ、ケシクリカラン、反応ゼロ。ノってきたので期末中間は省略。「そして」を立方、忘れもしない十月一日、大手前三大祭のひとつ文化祭。我がクラスは、喫茶店『旅の宿』。まな板を焼いてつくった看板のもと、満席満席、入れません、はい、プリンアラモード、百円。舞台裏は大さわぎ、レコードの音は聞こえず。ついにはみんなかすれ声。文化的？何を言うのです。私は他は何にも見てないのですゾ、午前中『旅の宿』、午後はクラズ、いそがしい。えっ、どうしてくれるんだ。つかれたよ。「そして」を四乗、ファイヤーももえてる、皆さんお楽しみのフォークダンス後の二次会知ったことか。ビルの谷間から見上げれば、街灯の光にもめげず、ギラギラ輝くあの星は、わが太陽系の一員、木星ではないか、なんとはなしに、我々に似た星。ゾー。

……心にうつりゆくよしなしごとを、のべつまくなしに書きつらねてまいりましたが、長いようで短く、内容の濃いようでうすい一年。（ああ、名詞止めは中止。）こんなクラスと逃げるのはひきょうなり、何か書かねばならぬ。ブーンブーン。その一、狂ったクラス。ちょうちょがヒラヒラ。その二、楽しいクラス。地球がまわってる。その三、非大手前的なクラス。はは、帽子の下に顔がある。その四、小生めがクラス紹介を書かねばならないほど、文学的にダメなクラス。文句のあるやつは、今から新しいの書いてくれ、それは知らん。せまるショッカー、地獄の軍団。×××××××××××××××××サイレンの音、人の声、エンジンの音。

まったく、おつかれさま、先輩よ、同志よ、後輩よ。（まだ、ナオラナイラシイ。）著者のぼやき、午前三時、どうしてくれる、助動詞、動詞、形容詞に形容動詞、期末は目前、どないしたらエエンヤ？？――タイミングよくまともになるので、ご心配なく――、はい、以上です。おしまひ。

クラス紹介

一年三組

◇入学式。緊張と眠け、不安とアクビの内に無事終了。　◇第一回平常考査。結果、落胆せざるをえなかったもの半数。己の頭の悪さに心底感心したもの残りの半数。筆者は一人自分の底知れぬ実力に驚嘆したのであります。　◇中間考査。先の平常の二の舞にならぬようミンナ連日徹夜の試験勉強。が、結果、半数の者が再度落胆、残りの半数は再度感心。筆者は再度驚嘆したのであります。（ウソつくなアホ！キサマ一人、クラスの平均を落としていたのではないか！）ドウモスミマセン。こういうわけで、筆者の努力もさるものながら、以後我がクラスは勉強の面では学年のトップを独走するのであります。　◇自治会祭。この頃にはすっかりクラスのミンナも打ち解けあい、かつての緊張感もどこかへ行ってしまった。緊張感はもとよりハジも外聞も、はたまた羞恥心をもいずこかへ追いやった連中が中心となり「恐怖の迷路」を公開。学校中の噂と非難の的となる。◇バレーボール大会。六人制はあぶなげなく無事一回戦敗退。九人制は惜しくも試合時刻に人数がそろわず、実力を十分に出しきれないまま見事に不戦敗。石川担任も、この潔い負け方にほとほと感心。こんな具合に一学期も無事終了。さて、二学期にはいると我がクラスも全校のハジというハジを一手に引き受け、まさしく羞恥の境地をさまように至りました。　◇水泳大会。我がクラスは水泳訓練の成果を十二分に発揮しようと各人が力泳に力泳を重ねたのでありますが、終始他クラスの泳者のアシストに終わり、惜しくも全員予選で失格。校内唯一の無得点記録を見事に達成。石川担任もこの夜は眠れなかったという噂も流れている。　◇コーラス大会。我がクラスは予選最後にフィナーレを飾るごとくサッソウと登場。日ごろの音痴ぶりを遺憾なく発揮。各人、はたの者を気にかけず、ヒタスラ声とおぼしきものを張り上げる事に専念。指揮と伴奏も適度な乱れを催したまま、無事一曲を各人が歌い遂げたのであります。が、審査員はこれをコーラスと認めがたく、全校最低点を記録。傍で聞いていた石川担任もいたたまれず、思わず耳をふさいだのであります。　◇体育祭。我がクラスは日ごろの運動音痴ぶりを惜しまず披露。なんとまたもや全校最低点を記録。ここに快挙四連覇を達成。石川担任もいよいよ教育者としての自信喪失。　◇文化祭。「知られざる古都・スライド」で再び悪評の旋風を巻き起こす。なお先のコーラス大会の汚名を返そうと二名がのど自慢大会に出場。見事仲良く最低点をとって退却。　◇バスケット・サッカー大会。第一回戦は男女とも納得のいかない、とても理解しがたい勝利を修める。が、二回戦は日ごろの実力に戻り難なく敗退。……てな具合いで、誠に活気にあふれ、万事にすぐれたクラス、それが一ノ三なのだ！シラケ派コメディアンもいれば、毎度陽気（妖気）なカシマシ娘もいる。『静けさや、壁にしみいる、イビキの音』授業態度もことさらよろしく、筆者も含めてミンナマジメに勉学に勤しむイイクラスだった！（何言ってやがる！散々我がクラスの悪口を並べやかって！この雑文野郎！オヌシの国語の点じゃ、こんなものだろうが……）ドウモスミマセン。しかし、この喫劇（悲劇と言え！）は、あくまでノンフィクションであり、事実を筆者はありのままに紹介した次第であります。なにはともあれ、一年は過ぎた！同志よ、ふんばれ！『嵐の中でも時はたつ！』……〔欲嘆雀躍、今、春の日なり〕

クラス紹介

一年四組

かの有名な一年四組はなにごとにつけても、「座ぶとん」であります。解釈は、ご想像におまかせいたします。私ども座ぶとんがあったからこそ他のクラスが優勝という感激の涙を流すことができたのです。

考えてみますれば、初めからこのクラスはなさけないありさまでした。初めての行事自治会祭では、中学生の時の若さがみなぎっていたのか、すぐさま参加決定。おかしのサービスまでやったあげく、満員御礼の喜びをかみしめることができなかったのです。おもえば、この時、みなさまの暖かい御声援をたまわれば、私たちのみなぎる若さも消滅せずにすんだのです。

夏休みの水泳大会では、最下位を脱したものの、バスケットボールやサッカーの試合では、みごとに一回戦で敗退。まあ、一年四組とはこんなクラスですな。

文化祭では、自治会祭のこともあって、しぶしぶ参加。やっときまったのが、みなさまから御好評をいただきました、「わらしべ長者」であります。（筆者として、つけ加えておきますが、この劇をみたのは、学校中でも、ほんのわずかだとか）舞台装置と共に灰となって上空に舞い上がりました。また、わが一年四組は、無気力に逆もどり。無気力と有気力が四ケ月を周期としてやってくるクラスなのです。

このようにおもしろくないクラスですけれど、クラス替えはしてほしくありません。このクラスほど試験が近づいても、あわてず、あせらず、のんびりしたクラスはないからです。しかし、みなさんがみんなのんびりしているわけではありません―つけたし―

このままのクラスで修学旅行にいけたら、どんなに楽しいだろうと思うのであります。

クラス紹介

一年五組

我がクラス一年五組のホームルームは、みなさまご存じの、二〇五。本館二階、扇のかなめナノです。便所とは数メートルしか離れていないのでたいへん利用しやすく、筆者の知る限り、男子用、紙付き秘密の部屋のドアは、五組以外の便護士によって閉じられたことはなかったのです。（陰険や！）教室移動が極めて多いにもかかわらず、新館との場所交代の話が出たときは、見事にその話を放棄した、愛室心（？）の強いクラスでありました。もっとも、交代に反対したほとんどが女子でしたけれども。

五組の担任は、すばらしい体格の持ち主、綿谷芳夫先生。保健の先生であるのだけれども、数学から漢文まで、何でもござれの博学者。毎日八時三五分、「仕事やめー。ちょっとこっちを向いてー。」の声と共に現われる先生なのです。

対する生徒サン方は、個性と自我の塊まりであったように思います。常に相手をほめたたえ、常に自分が相手より数歩抜きんでるように努力する。まあ、現代日本青年の標準的パターンとでも申しましょうか。スプリングに紹介するほどのことではないのです。

想い起こせば、涙が飛び出しそうな、なつかしい思い出ばかりです。卯月の自己紹介でH君は、ある女子の順番が回って来ると、拍手をしたのです。（陰険や！）。定期テストでは、Wさんがいくらがんばっても、学年トップにはなれなかったなァー。水泳大会もあかんかったし、バレーボールも、コーラス大会も、バスケットボールも、体育大会も、みんな、あかんかったのです。ところが、サッカー大会では、必負を期していたにもかかわらず、学年優勝してしまったのです。（以後、五組の女共は、男のドレイとなった）。

お祭り騒ぎの好きな五組の面々は、なぜか自治会祭で、マジックハウスなどという、わけのわからんものを、やったのです。中心になって、よく働いた人々は、「成功だ、成功だ。」と、うなっておりましたが、多数の無関心派の人々は、白い目でそれを、ながめていたのです。（決してクラスが分裂をしていたのではない。その証拠には）文化祭では、大活劇、「青春とは何だ！」を上演。出演した人、裏方、みんな一体となって、ガンバッたのです。そして、その内容のしらじらしさに、満場の観客は、大かっさい。クラス一同は、その成功に涙したのでありました。

また、文化祭二日目の、ブラスバンド同好会の演奏のときには、五組出身のトランペッター、N君の名前を叫び続けたのです。このときの全員の一致した心は、二度と再び、得ることのできないものでありましょう。

要するに我がクラスは、一人一人が、目立とうと、必死の努力を続け、一人よがりの点及び群衆心理極めて強く、けんかも何もなかった平和なクラスだったのです。つまりは、最も人間らしい人間の集団だったと言えるのではないでしょうか。

クラス紹介

一年六組

「6組だけは自習にすることができないと思って神経痛をおして来たのです。」6組をこのようにおっしゃった先生がいらっしゃいます。われわれのために、担任がどれほど職員室で肩身のせまいを思いをしたかと想像しますと、筆者などは、6組の面々を泣かしたろかと思うのであります。

さて、その担任は、文芸部とラグビー部の顧問でもあるもりのぶや氏という一見たいへんおとなしそうな方で、生徒たちは、「思い出すだけで楽しい」男26名女19名であります。兵庫県民もおります。只今、カップルの数、ゼロ。それに準ずるものの数、想像にまかせます。最初は、HRが二〇一番教室で、たえず移動、そのためか、落ち着きが無かったのです。主として、三年生の教室へ参りましたため、見聞を広め、知識を増したのであります。そして「今日のことば」が生まれたのでした。その後五〇二番教室へ移り、その結果、ヒマができたため、寸暇を惜しんでカード（わかりますね？）にうち興ずる者が現われたのでした。

ここで筆者は6組が成し遂げた業績のいくつかを挙げたいと思います。思い出すうちに笑ってしまうのであっさりといきましょう。

まず、バレーボール大会で男子九人制に優勝。白治会祭については、中庭のお池の金魚にやさしく個人的に尋ねてみて下さい。しかし、金魚語を解さない人のために、申しそえれば、ヨーヨーつり、金魚すくい、わなげなどをやったのです。

夏休みには夏季登山に担任以下8名が参加、ドボンを覚えて帰って来ました。そして夜になると変身してその正体を暴露した人があります。

ああ、それにしても水泳大会のあの逆転劇をだれが忘れられましょう。初Hは零点だったのです。しかし、最終日にはすばらしい成績をあげたのでありました。それよりしばらく後、コーラス大会がありましたが、これは決勝まで残っては指揮者の腕が折れる可能性がありましたので、ブービー賞をとることにしました。体育大会では、胸に赤いサソリのゼッケンをつけ、黒地に真紅のサソリの旗を振り回したにもかかわらず、他のクラスに得点を譲りました。そして文化祭では星新一原作、劇「殉教」を上演しましたが、あまりにハイレベルな内容だったので一般の好評を博すことはできませんでした。大阪城のお堀の橋の上で開いた二次会！ 花火を楽しみ歌を歌ったのです。

二学期の中間テストではすばらしい平均点をあげ、先生をして「夢かうつつか」と言わしめたのです。そしてあの足でボールをける競技でも学年準優勝。その翌日、トランプ禁止を宣告されたのです。

このようにいろいろあったクラスでありました。しかしのってたのは一部のものだけであったような、HR活動にも無関心な人たちがいたようなけじめのない、レギュラーメンバーでたまにそうじするクラスだったような気がします。しかし我々は6組を愛し、高校生活最初の一年を楽しんだのであります。きっと我々は宇宙の平和の輪を広げる者となるでしょう。

◇　一年七組のクラス紹介を読む前に聞いてほしいひとり言。

もうクラス紹介書かなあかんの？　もう4か月しかないんやわ、一年六組でいられるのも。……（筆者注。涙によって原稿用紙が見えぬのかと思うとほんとはおしまいだった。）

クラス紹介

一年七組

前略。

そして後略……

いやこれでは7組のみんなにあまりにも申しわけがない。ゆえに我はガンバッテ書く。

時は西暦一九七二年四月八日土曜日にさかのぼる。なぜかしらないけど雨が降ってマス（ハイ）外は冷たーイ風が…。この日、幸か不幸か、縁ありてオオテマエに入学し、縁ありて一年7組になった者（男子二六名、女子一九名）が勢ぞろいした。教室にはいる。あたりはシーンと静まりかえっている。（これを嵐の前の静けさというのであります。）次の日であった。一人のうれしがり登場！ジャーン！その名はMr.Xちゃん。よくあれだけあほなこと言えるなあと感心した人多数。……

五月になりました。ポカポカとアッタカーイ日が続く。スイミンにもってこいのお日より。一人二人、あれ？あんまりねてないね。そして中間テストもすみました、六月に雪印見学に行きました。（モチロン○○○○○○○○Hあてで（私目の独断））アッ忘れておりました。五月には遠足に行ったのです。このときぐらいからでしょうか。なんとなくうちとけてきたのは……

そして自治会祭。我がクラスはゲームセンター。（カッコイイ）なんと『みんなで遊ぼうピンポンパン』だって。この名まえつけたん誰だろうか。キンギョすくい、わなげなんかがありましたです。ハイ。

期末テストも済みまして明日からうれしい（？）水泳訓練。なんせスゴイ雨が降ってカゼひいた人数十名（ウソ数名）。ほんでもって寒かったよ。

そして暑い暑い夏のお休みも終わって楽しい二学期がやってきました。（モチロン、テストに関することは一さい除いてです。）まずは水泳大会。我がクラスの女子でOR（大手前記録）つくったもの二名あり。その他あまりふるわず。休育祭、少々ふるわず。そしてもうすぐ文化祭ナノダ。

文化祭に先がけてコーラス大会予選。校内優勝確実（ウソ）なんてうわさされていた七組。なぜかふるわず落選。（キット審査員の虫のいどころが悪かったのでしょう。）文化祭は「バザー」をやりました。すごい人気で昼までに閉店したとか……このときクラスのみんなが一番のっていた時だったと私は思う次第であります。

遠足・テストもおわって、はやくも十二月末。校内籠球大会において、我がクラスの男子連をみなおしたもの女子のなかで多数。なんせ学年第3位。これは男子の血と涙と汗の結晶（少々オオゲサ）やってんよ。それにひきかえ女子のざまはなんだ。一回戦で姿をけしてしまったのであった。蹴球の方もあまりふるいませんでした。

そして現在十二月初旬。ストーブがついてあったかーいのデース。休み時間になるとストーブのまわりに集まるもの数名。又○○の時間にねるもの数名。なんとなくなごやか。

よくよく考えてみると、とてもイイ組です、一年七組は……

クラス紹介

一年八組

フーッ。（原稿用紙を前にした、筆者の絶望的なタメ息。）

「ねえ、だれかスプリングの原稿書いて。ねえってばぁ！」という私の切望に誰一人耳を傾けず、結局、文化委員である私がない才能をふりしぼって、原稿作成という難事業にアタックするハメになったのであります。

前置きはこのくらいにしまして本文へ。

一年八（パー）組。これはいったいどんなクラスなのでしょう。一言で言うと、クラブバカと、勉強の虫の集合体なのであります。（中には両方共という超人も若干いる。）まず目につくのがサッカーバカ。入学式の日にグラウンドでボールを追っかけて走り回り、入学式の始まる前に、みなさんは、「寒い、寒い。」を連発していた講堂の中で、一人だけ上着を脱ぎ、汗を流して、「ウギャーッ、暑い。」とさけんでいたのであります。

このサッカーバカに負けじと頑張っていたのが、剣道バカであります。棒きれさえ見つければ、あたりかまわず、奇声を発して振り回すのです。そばにいる者は、いつなぐられるかとヒヤヒヤのし通しなのであります。

運動の方ばかり書くのもナニですので、次は勉強の方。とは言ったものの勉強の虫の正確な実体はつかめないのであります。なぜなら、テスト前になりますと、がぜん虫は増加し、クラスの者のほとんど（私を除く）が虫と化すからであります。しかし、私が信頼できる筋から聴取した情報によりますと、すでに、「試験にでる英単語」とか「基本文型三五〇」とか言ういかがわしい本を常に携帯している者が、若干名いるもようであります。

個人の事は、これくらいにしまして、クラス全体のことについて。

各大会においての成績はと申しますと、何といっても輝かしいのが、バスケットボール大会男子学年優勝であります。ほかはと申しますと、バレーボール大会ムニャムニャ。水泳大会ムニャムニャ。そしてサッカー大会もPK合戦の、ゴールキーパーの超人的な働きがあったにもかかわらず、やはりムニャムニャなのであります。

次に文化活動はと申しますと、自治会祭で、見事に大集賞を獲得しましたが、これは〇〇君一人の働きによるのであって、クラスの団結はいっこうに見られないというのが現状でありました。文化祭も一年でただ一クラス「不参加」を決議したのであります。（ああ、何たる無関心、無責任。）

最後に、成績はと申しますと、その名の通り学年最低の全くのパーなのであります。しかし私はこの事についてあまり触れたくないのであります。なぜなら、我がパー組の平均点を下げている人物の中で、その功績が最も大きいのは、何をかくそう、この私自身なのであるからなのです。したがってこの件については、ここで打ち切らせていただきます。

全くの乱文で失礼いたしました。当然、書かれるべきカップルとか、女子の顔等について、私があえて書かなかったのは、まだ命が惜しいからなのであります。それから付け足しのようになって悪いのですが、担任の中川先生、こんなどうしようもないクラスの面倒をよく見て下さって、クラス一同感謝しております。これからも、あのダイナミックなフォームで、半紙の裏に、力作を書き続けて下さい。御健康を、お祈りいたします。

以上でクラス紹介を終わるのであります。（文章中頻発された『あります』は山口県の方言で、軍国主義とは何ら関係ありませんのであしからず。）

クラス紹介

一年九組

頃は一九七二年（アア、沖縄本土復帰の年でアリマシタ。沖縄の在日米軍の撤退問題につきましては……ヤメトコウ。）卯月八日頃なれば、わが一年九組諸氏は清く正しく美しき初心を胸中にいだきて、（中には彼女からもらったペンダントなる物を胸にいだいている野郎もいたが、）サッソウと、かつ、男子はおしとやかに、はたまた女子は強く、勇しく、かのわが校一と称せらるるワイドな五〇三番教室の一座席に腰をおろしたのでありました。それからはや、もう一年。なんと変遷の激しきことか！（新入生諸君。「初心は忘れるべからず。」ですゾ）

朝は早うからカンテラ下げて、（じゃなかった。）朝は早うからボロボロになった布袋をひっさげて走りくる女子とも男子とも見分けにくき者—数名。とは言えども八時二十五分の予鈴までに教室に入った者—本日十四名。なぜだろう。なぜかしら。と悪い頭をひねって考えたところ。わが五〇三号は我らが政治路線は（マタちがった。）我らが火手前においては一番の辺境の地なのである。東京で言えば夢の島。北海道ならば網走刑務所。下足箱よりこの五〇三号まで来るには多く時間を必要とするのであります。ゆえに……——というのがわらわの結論（言いわけ）なのであります。しかし、よく考えてみるとわれらが一年九組の諸氏は奇術師なのですというのは、あの予鈴から本鈴の五分間に三十数人という人物がわが教室のドアを一人は「今日も元気でやろう。」という顔で、また他のほとんどはネボケマナコで開けるのでありますから。

そして個々なる朝のごあいさつのうちにかの有名な片山先生が教卓の前に登場なさるのであります。そのあとを今日もまた二人の遅刻者が足音をしのばせて教室にはいってきましたネ。いくら足音を忍ばせても鬼の？仏の？片山氏にはすぐに見つかってしまいます。そこで彼は「コラ！」と奇声を一発、発せられるのであります。この朝のホームルームの光景は、いかにも紙しばいか、はたまた、キーハンターでも見ているようでとっても楽しいのです。

我が一年九組諸氏は、休憩時間をどのように使うのでありましょうか。まず、自然へ帰ることであります。が、この説明をするほど私は純情ではございませんのであしからず。第二は、栄養をつけることであります。男子諸君などは火曜日の第三時限が終わると、保健のトラエ先生の目をかすめて休み時間中に口の中に放り込むのです。（新入生諸君。「食事は決まった時刻に決まった量食べましょう。」ですゾ）第三には玉で遊ぶのであります。教卓の上において直径三センチほどの鉄の玉を敵地にうちこむ楽しさは格別のものでありますョ。これだけでは読者諸君は一体、どんな遊びなのかお分りにならないでありましょう。それは、わらわの表現力不足によるものであります。深く反省しております。（と、口では言うが）

全く、われらが一年九組はどんなクラスでありましょうか。わらわにもさっぱり見当がつきません。しかしながら、われらがクラスが学年最高の調和のとれたクラスであることは皆が認めるところであり、またわらわもそれに賛成するのであります。（ちょっと、調子良すぎたかな？）

最後に一つ、新しき一年九組の諸君。われらの伝統を守り、本年もまた一年九組を良きクラスとすることを期待する次第である。オワリ。

クラス紹介

二年一組

我が大手前27クラス中あの近代的なムードにあふれる食堂（？）に最も近くある別館の402番教室には、親の因果か前世からの因縁か二年一組という名のもとに、25名のヤロウと21名のオヒメサマと、そして湯川秀樹氏も我がライバルと賞讃したかどうかさだかではない桑原先生とが、この大手前において謙遜・恥・気品などのことばを忘れ生活してたのでございます。

一組といえば、組替えの時、美しき乙女達が多く集まったと前評判が高く、筆者のみでなく他の野郎共も喜んでのでありました。（しかしながら評判倒れという噂もチラホラ巷には飛んでいるようですハイ。）この一組の同志は、まあ何というか祭り好きというか興奮すると我を忘れるというか、自治会祭においては、始めは悲劇で行こうと決まった『白雪姫と七人の木こり』（何故小人でなく木こりか我輩にも今だ謎でございます。）が、当日には喜劇となる、超人的離れ技を恥も外聞もなく披露したのでした。しかし運動関係では、得点の大半をオヒメサマに取ってもらい見事全校二位になりましたのでございます。（その後一組では女子の事をオヒメサマと敬語を使うようになったのではないかといわれております。）でも、そのままうだつの上がらぬ野郎ではございません。籠球大会・蹴球大会では、オヒメサマからの黄色い声は全て自分に向かっていると信じつつ、学年第二位と栄冠を勝ちとったのでございました。（でもどうして祝賀会を開かなかったのか、我輩には残念でなりません。）

しかしながら、我がクラスのもっとも特徴が発揮されたのは、大手前恒例のコーラス大会でしょう。この大会により大手前に二の一ありと名をはせ、このこと抜きのクラス紹介なんて、コーヒーを入れないクリープみたいなのです。それは、我がクラスは指揮者の山川氏あの色気のあるうつろな瞳（一説には寝不足だとも言われますが）がオヒメサマ達を魅了したためか、それとも筆者が実力を出したためか、どういうわけか第一次予選通過。第二次予選を目ざし自由曲を「ジャンバラヤ」なるメリケンの曲と決め、日曜日も返上、チャートもオリジも重問も捨て頑張ったのでありますが（と逆接の助詞が来て何やら不吉な予感）元来一組は己れさえ目立てば良いという考えの持ち主が多いので、コーラスとは名ばかり、一見コミック楽団というムードになり、ああ忘れようとも忘れられない、何と第二次予選当日には、歌の終った瞬間、クリスマスでも誕生パーティでもないのにコメットをパンパンと数個鳴らしたのであります。その時の観客・審査員の方々には、拍手を忘れただ、口をポカーンと開け驚きと感動と馬鹿らしさのためシーンとしたままでした。巷ではあれをしらけているというそうですが、わが一組の面々は、やった！成功だ！と信じつつ、翌日の結果発表においてくやし涙を流したのでありました。このことは大手前史上に、大きな汚点としてさん然と輝くことでありましょう。

そして二年一組は本当に楽しいクラスでったと思う。若干きどった田舎っぺちゃんや、まぬけなボンボン野郎であったけれど、みんないい奴で、そのために、二の一を別れるのイヤ！という女性が多数出たとか出てないとか。

二年一組　万歳　大手前　万歳　17才万歳　筆者万歳

クラス紹介

二年二組

私はジプシー。あの日―そう一年前―この村へやってきました。奇妙な村です。一人長老を除いて、村の衆の齢はあまり違わないのです。長老は村の政に助言を与えたり、指導をしたりして過ごしておられました。また、ヨットが大好きであられて外国の人とよく顔を会わされ親善につくしておられます。そういうわけで政は村の衆にまかされ、私がこの村に来てから二度程選挙があり、国政の代議士はじめ村役が選ばれました。

私はジプシー。国の法律で服装が定められていたりして、村の衆からは特別な目で見られることはなかった―ふざけたりした時は別だけど。眼鏡をかけている人も多かった。かけておられない衆は四・五人に一人だったし、また、ずっとかけておられる衆も同じ位で、村の衆は割と近眼なのに眼鏡がいやなようでした。村民ではないのに特別に私は、考査と呼ばれるものを受けさせていただきましたけど、村の衆は皆賢こくあられて、いつもどん尻でした。ジプシーは、村の考査を通らねば、その村を去ることはできませんので、ひょっとしたら、ひきつづきもう一年この村に留まるかもわかりません。

私はジプシー。気ままな生活なので、村の衆にくっついて、いろいろな行事を過しました。旅行で、くらま山に行った時には、見上げるような階段に息を切らせ、雨にぬれたりしましたが、村の衆は楽しそうでした。南九州に行った時には、艦・車にに酔うこともなく(三十八度線においても)車中では、ガイドさんと、だじゃれをとばし、小咄も数え切れない位出たり。ああ、ガイドさんの誕生日が11月27日とかで、村の衆にも男女一人ずつおられるそうで、おめでとうございます。振った振られたと村の衆は中されていますが、何の事なんでしょう。祭りはといいますと、春秋とも、まわりの市町村がかたまっている所から離れ独立独歩、内輪で興じておられました。国民体育祭では、実技は駄目でしたが、応援に頑張られ、まわりの市町村と結んで、1mを越す旗ざしものを振り回されました。村の衆はどういうわけか、仕事を好まず、休憩になる度にナポレオンなるものをやっておられる方々が多く、そのまわりをさらに観客がとりまくといった風でした。また○○会なるものが結成・崩壊し、村の衆は競っておられましたけれど、ジプシーの私には皆目見当がつきません。

私はジプシー。ふらりと一年前に寄った村に住みついて親しみをかくし切れなくなってきました。いつかは、わかれねばならない運命に嘆き、そのために、いつもは、はまらない穴に足をつっこんでしまったり、戸のかどに頭をぶつけたり、夏の間、私の足をさしに来た「か」さえ楽しい思い出で、床のきしる音にも悲しみを覚える今頃です。

――ジプシー日記より

後記―ジプシーさんが書きつくしてくれないので僕ことパンダが残りを埋めます― 良いクラスじゃった。ナポレオンでは、ジョーカーが良く回ってくるし、美男?美女?!に囲まれて僕一人劣等感におち入ったり、学校へはいって、初めて英語で平均をこえたりした?恋愛運には恵まれなかった―失恋―この顔じゃしかたがない。しかたがない、しかたがないで、一年をすごし、今このクラスを去る。―埋めるのも楽じゃないねえ。

クラス紹介

二年三組

クラス紹介と云ったって、別に取り立てて云うこともないような、平凡なクラスだ、いや だったと思っているんですがね。まあ、とにかくこう云うクラスだったと紹介しておきましょう。まず一学期ですが、僕としては別にこれとして印象に残っていることはないようですね。行事は、遠足とか自治会祭、それに校内大会などがありましたが、遠足は雨が降っていてさんざんだったし、自治会祭はゲームセンターと云うような形で参加したんですが、あまりうまく行がなかったように思っています。そうだ、大事なことを忘れていました。バレーボール大会男子六人制で学年優勝をしたことです。その時僕は六人の内には入っていませんでしたが、他クラスに対して妙な優越感を持ったことを覚えています。そう云うふうなことがあって、だんだんとグループ的友情なるものが芽生え、グループ間の交流などがあって一応、地縁的共同体と言うような段階が完成されつつあったように思っています。

さて夏休みも終って二学期。二学期は色んなことがありまして、興味深いことばかりでした。まず体育祭ですが、成績は良くはありませんでしたね、はっきり言って。でもね、おもしろかったんですよ、そんなに白けることもなかったが、「あかんなあ～」と言いながらも、勝手なヤジばかり飛ばしたりして応援したりね。「お、あいつが走ってるやないか！」と云うようなね、クラス意識を離れて、四十五人に、いや自分を除いて四十四人に対する友情と云うものを感じたように思いますね。文化祭は参加しなかったけれども結果的にはそれでよかったんですよ。二次三次、四次会までやりましてね、女子に電話をかけたり、あだなを付け合ったりして、ちょっとしたハプニングもあって、そう、本当に西田君はかわいそうでした。

さて、とうとう問題の修学旅行のことを書く番になりました。本当に修学旅行はすばらしいものでしたよ、予想以上に。普段ではわからなかった級友の側面を色々と発見できるんです。そうなると本当に屈託なく話しができるんですね、それに時間も余るほどありますしね、僕達なんか夜明方まで話し合ったりしましたよ。僕個人といたしましても、忘れられない思い出がありまして、結果的にはダメだったんですが、ま、それだけが心残りですがね。旅行前と後とでは、クラス内の雰囲気と云うかなごやかさと云うか、それがすごく違っていたんですよ、本当に。仲間意識なんかじゃなくて、何と云うかな、四十五人の四十四人に対する友情とまで行かなくても、そう云うふうな単なる級友であると云う以上の意識がそう云うふうにしたんだと思うんです、少なくとも僕はね。三学期はこの文の締切りの関係で書けませんが、まあ、このままの状態だけは維持できたと言えると確信しています。これで我がクラスの紹介は終りなんですが、つまらなかったですか？でもね、わざとらしいギャグの連発のような他クラスの紹介文よりはいいと思うんですがねえ。最後に言わせて下さい、僕ははっきり言って、「集団美」とでも云うか団体が何か一つのことをしてね、ああまとまっていてすばらしいなあ、なんて云うのは嫌いなんです。一人一人個性があって考え方もかなり違うはずなんですね、だからそこにはかなりの反発や妥協が伴っていると思うんです。そこを克服してこそまとまったいいクラスだ、と言う人もいるでしょうが何かゾッとする物を感じるんです。

クラス紹介

二年四組

暮れもおしせまった今日、今教室には男女が数人たむろっている。バトミントンをして無辺世界に飛ばしている者、すぎ去った過去の感傷にひたっている者、ただ何となく手で拍子をとりながらひとりリズムにのっている者、そして、味気なく原稿を書いているこの私、すなわち No.1

二年四組って……G先生のおことばをご紹介いたしましょう。

「いやー、私は感激しいたしました。大手前高校にまだ、あのような素晴しいクラスが残っていたなんて、教師としてこんなにうれしいことはありません。」これで、修学旅行おわってより、十二月二日までの数学の授業を御想像いただけるかと。年ならず、一日あけた十二月の四日。「こら、早よ書かんか。」「これとこれ、わかるかな！」「他人のノートなんてもっていかんと自分で考えろ！」一日をしてこの違いを生ぜせしめたものは何か？

修学旅行でギャグ300を目標にがんばった会長殿をはじめ、ボディービルをはじめ、「キンシ」「泣きの芸」を披ろうとした生き仏様とその弟子たちなんちゅうても、かんちゅうても、二年四組がその真価を発揮したのは修学旅行であったのです。

船のデッキで純情メロドラマを展開した人。「母恋し」とみみずく抱いて寝た女の子。都井岬の海をみて感慨の涙を流したをの子三名、鳥もこわけりゃ、かしわもこわいついでに卵もたべられず。

体育大会では、オレンジだすきがかけまわり、赤黄緑の旗印、ついに勝ちえた優勝杯。無心の勝利の感激が、クラスの和の輪をひろげゆき、フォークダンスの輪となった。ゆれるほのおにほんのり染めて、心の灯をともしてゆく。やがては一千羽の鶴となり、稲川先生の回復の願いを託し大空へとはばたいた。

最後に、二年四組の生徒讃歌。（受験ブルース）

「三位一体」の質問に　清少納言のだジャレが
顔を赤らめがんばるは　いみじうおかしというけれど
男子生徒のあこがれの　岡田のシャレの方がずっとましだ
花もはじらうおみっちゃん　岡田のシャレでもまだましだ

この「of, should」の用法は　「教王護国寺」どこのこと
去年ちゃんと言いました　京都の人でも知らへんえ
あとで調べておきなさい　日本史の近松氏に聞いたなら
わからなければ7組へ　東寺のことですわかりますな

あとは計算だけだね
あとでやっておくように
いちおう式だけきいておこう
二十二番のうわつじくん

最後の最後に清水先生、稲川先生のおられない間担任をして下さいましてどうもありがとうございました。（サアー清水先生におみやげおみやげ）

クラス紹介

二年五組

過去9ヶ月間における当クラスの実態を、この紙上にさらけ出す訳だが実のところ筆者は驚いた。と言うのは新クラス発表の時に遡るが、なんと知る人ぞ知る旧丁組が8名（しかも粒よそろい）も揃ったのである。その影響の大なる事筆絶の域を脱し、2ノ5＝旧1ノ3となる。

やたらにギャグやら陰語の飛び回る、奇想天外なこと言うべうもあらず。

それでは一例を…春のexcursion↓彼らは嵐山に、現地にて清水谷と交流及び上流より流れ来る多数の缶に投石を働くこと、自治会祭にて「木枯し紋次郎」を上演、これのうけたることはなはだし、文化祭コーラス大会にて全校二位を獲得、修学旅行にして旅の恥をかきすてるその量の膨大なこと、数えきれないのだが、何も行事がある時だけではなく、日常においても奇怪なクラスである。そこで他のクラスにてのインタビューよりS君曰く、「不思議ですよ、あのクラスは。だいたい始業ベル、終了ベルが鳴るのに人の出入りは変わらず多い。それに毎日2時限終了ベルと同時に数名が飛び出してくる。又先生が教室にはいれない。」…外部の声はこうあるが、当クラスにおいては一切を気にしない。当クラスの自然状態として、非常に生存競争が激しい。授業中、自分のtextと先生のがexchange。ごくたまに、帰ってみると自分の机が教卓上にしばりつけてある、これらはあるグループの仕事であるが、全員が常に四方に注意を払わねばならない。個人的に見ても又しかり、広く浅く美人（？）のみと交際をもつ人、すぐ fall asleep する人、やたらに大口をあける人、おどり好きの人、自制心・羞恥心を知らない人、男子をひきつける人、以上、とにかく奇怪なのである。なおこのクラス全員に共通することは、笑いすぎによる腹痛に強いこと、想像力のたくましいことである。

これほど悪態をついたままでおくと、この筆者も通例のごとくクラス八分にされてしまう。∴ここらでほめておくと、全ての事態に共通して言えることは、例外なく団結力が強いと思われることである。（＝集団暴動かも）又、それと同時に、各人それぞれのやり方で、たった一度の青春を大いに enjoy していることである。2ノ5の構成員なら、だれでも知っていることだが、2ノ5にシラケはあっても倦怠はない。

ギャグや陰語があっても欺瞞はない。

（非人間性は大いに存在。）（それと女上位でない。）

若干、ネジのゆるんだクラスではあるが、三無主義・人まかせ主義のはやるクラスなんかとは較べものにならないほど、楽しいクラスなのである。（ほめ方、過剰であったと、大いに反省）

どこから見てもこのクラスは非常に遊び好きである。前出したが、先生が教室にはいれないのも全てこれに起因する。現在、休み時間、当クラス後部広場にて、片手うけ選手権大会がもよおされている。当クラスは各球技大会で早々と失脚したため、一部にはこれを学校行事にと言う声もささやかれている。

この話はノン・フィクションであって、登場人物の名称は全て××である。この件に関して筆者は一切、関知しない。

クラス紹介

二年六組

これは、大手前の奥深く、大阪城大奥の出張所ともいふべき、出口のない御教室にくりひろげられた、恐怖と笑いの入り混じる物語でございます。時は、一千九百七十二年。将軍徳川正人の御代でございました。これから御紹介いたしますところの主人公は、あまた多かれど、数にして四十五名と一人。いかなるめぐりあわせか、前世の悪さか、この御部屋に、卯月の八日、突如集まったのでございます。この御部屋をとりしきるのは、関白粟田殿（俗に栗根殿トカ）……この辺、時代考証は真剣に考えないで下さりませ。片方、この御部屋の勢力をもつ、生国は河内国の伊都の御局様。（この方の口癖は、○○してくれい。）この二大勢力の争いはいつも御局様に分があったようでございます。（勢力といってもこれは話の上でのことデス。）出口のないと申しましたが、その恐しさよ。入口が一つの上、階段より遠い側となれば遅刻寸前者のいかにうらめしきことか。OUTの場合は、すぐさま将軍様直々の御下問がくだされ、オッソッウジ！一週間！いつぞやは、民の意をくまれ一日のときも…。アアなんとやさしき御心、とかたはらの方々、こそりてはらはらとうち泣かれぬ。日々は、まことにおだやかにすぎて、当麻寺まうで、北野交歓など、楽しかったやん。そして水無月に入りて、花ひらく六組第一期黄金時代の幕明けでございました。二大祭の一つでございます、白治の祭が開かれたのでございます。関白粟田殿を含む六人の御方々がみなのうちより選ばれて事に当たられ、夏は科学、とばかりに、トントンカチカチ、ビリビリ、ジャー（この擬音語のわからへん人は見に来てないな。）と始められ、幾多の障害を、媒介変数tの消去によって、のりこへられ、みごと完成したのでございます。（当日の客の入りは？ 沈黙。）こうして、いつしか、方々の心に恐しさは消え御部屋への愛、相互理解が芽ばえていったのでございます。秋はつとめて。いと眠きはいふべきにもあらず。第二期黄金時代は、朝練で始まり、せわしなくすぎたのでございます。中でも体育大会の活躍はめざましくまた二大祭のもう一つ、文化の祭には御部屋の方々こぞりて大ハッスル。芝居「月世界旅行」は大盛況のうちに幕をとじ、コーラス大会では、御局様と名尾子の方、それに蔵人頭指揮殿のもと、決勝で敗れたりと言へども方々の御心あひたり。（ファミリーファミリー）続ひて修学旅行。四十五名総ナポレオン。そのうち数名の方々こそ才あらめ。場荒しの方々あまた多かりき。しかし、なんであまりカップルができなかったんかな。かくして第二期黄金時代は去り、日中国交も回復し（なにしろうちにはパンダ君がいるもん。）あとはその反動か、いつのまにか時去りて、花の色はうつりにけりないたづらに、わが身世にふるながめせしまに（筆者）アア、あの活気は何処へ何処へ。今はもう師走。御部屋に残されたのは正味みつき耳。ちょっとそこの方（呼びかけ）蒸しパンをとりあいしている方々、最前列で舟をこいでいらっしゃる方々、資料集を突然隠す特技の方々、籠球小町の方々、機長の君、長き髪の二人の女君、保健の御教えにききいる女御、後へ逃げる殿方、G師にいつもあてられる方々、ストーブの近くからにげまどう方々美しき方々にたくましき方々…、早く第三期黄金時代の幕を明けてくださりませ。残り少なき日々を楽しくすごすこと、これみなの御願いでこそあらしめ。—掲帝掲帝　波羅掲帝　波羅僧掲帝　菩提娑訶—

クラス紹介

二年七組

えっ？！ 何？ 私が7組の紹介するの？ マサカ、マサカ、マサカ。というのが最初の驚きだった。考えれば考えるほど私にとって、恐しい事である。ほら、教卓の花瓶の中に、血走った瞳をギョロつかせている化け物の視線を感じないのだろうか。清掃道具入れに隠れて、中から鍵をかけてしまっている異様な物の気配がする。それに壁の内側から、こちらを凝視している何千という瞳。きっと彼らは、私がこれから君たちに何を話そうとするのか見張っているんです。もし、私がここに隠された秘密に少しでも触れようものなら、一度に襲いかかろうとして待ち構えている。だから、その秘密のことには触れずに話をしようと思うのだが、至極無理が生ずるのである。よろしい、覚悟を決めて、紹介を始めるとしよう。

我7組のメインエベントは、何といっても、修学旅行である。旅行中ずっと、揺れたくもないのに揺れるバスに反抗して、「バスを揺らさない会」を結成した者。本人は無抵抗主義者だから、結局は揺られていたのだが……。バスといえば、あの懐しい歌を思い出します。「フェニックスのこかげえ一つ、フムウー、ムフブー、宮崎のふたありいー、フウフー、ムウブー。」この歌に酔って、気絶しかけた者。フェニックスといえば、あの七色に輝く海の色が、一日中、目に触れて南国ムードを味わうことができた。一人で悪乗りして、フェリーから一瞬落ちかけた者。あとは、眠ても覚めても、トランプ、トランプ。

ところで、豪快無敵な会長のもとに、我等が7組の団結力は、「やると決めたら最後まで。」に象徴される。白治会祭での大悲劇「孫悟空」、体育大会で優勝旗を手にした他クラスを横目で見たときの感激。文化祭のときに、自転車に紙芝居を積み込んで、DISCOVER、OTEMAEに挑戦した勇気と飴チャンの忘れられない味。そして、秋のバスケットボール大会で輝かしい優勝にその威力を発揮したと思う。

二度とない今日の日を大切に生きようという誓いが、今日の我等ケ7組ワンパクでもいい……。

……などというのは至極簡単。しかし、言葉にした字面を追って行くだけでも、この教室に秘む物が、不満の声を上げるであろう。今まで7組という集団内に起きた事を紹介してみても、表面的なものでしかないだろう。実際にその中で、大切な高校生活を体験した者にしか、その中に隠された秘密めいた物を感じ取る事はできないだろうし、それに対する判断も下し得ないだろう。

消えてゆく。どんどん。瞳の大群の威力で消えてゆく。秘密に触れてしまったから。指先が見えなくなり、そして片方の腕が、体が、消えてゆく。終にすべてが消えてしまいもう何も見えない。きっと瞳も消えてしまったのだろう。

そして、ふたたび、新しい何かが生まれ始めている。

ZEUNAI

クラス紹介

二年八組

〔筆者前書き〕この紹介文は、90％の虚構と9％のお世辞と0.9％の不純物と0.1％の事実で書こうと思います。ですから、もし事実との不一致が発見されても驚かないで下さい。又、そのためにおこるいかなる事態においても筆者は責任をおいかねます。

〔第一部・師〕担任は南景雄先生です。先生の御先祖は代々土佐守だったそうで、今でも高知県のことを南国土佐とよくいいます。そのせいでしょうか、お口もとにどことなく高貴な雰囲気をただよわせておられます。又いつもにこやかな顔をしていらっしゃるので、話しかけやすく、女生徒の間では「光源氏」と噂され、根強い人気を博しておられます。そのおっとりとした態度は、男生徒の間でも人気が高く、8時30分に職員室を出られ、8時35分に教室に到着されるなどは、遅刻スレスレの者が涙を流して喜んでいます。しかし、長い間の庶民生活の影響のためか、授業中、話の種がなくなると、平気でタンをクワッ、クワッ、ペッ、と吐かれます。最近は、TVの「事件記者」に非常な興味をしめされ、毎週かかさず、近くの電気屋に見にいっておられるそうです。そのあまり、自分は新聞記者であると錯覚をおこされることが多く、クラス一同、これ以上病気が進行しないようにと、ただただ神に祈りをささげる毎日が続いています。

〔第二部・徒〕朝、2年8組、そこに集まる46人の瞳には、今日一日を生きようとする意欲と、輝やかしい未来への希望がみなぎっている。南先生は言われた、「30余年の教師生活をおくってきたが、ここに始めて青少年の真の姿を発見した。」と。すべてにおいて、全校をリードし、理想クラスと太鼓判を押され、ちまたでは、8組の辞書に「欠点」の文字はないのではないかと噂されている。うそだというのなら、一度8組へくるといい。まず、一目見て君は気付くだろう、なんと美人（含、男性）の多いことかと。ある数学教師は、我クラスにはいってくるや、大阪府美人コンテストの会場と錯覚、あまりの驚ろきに、あごがぬけ、それ以後「ス」の音が「シ」としか発音できなくなってしまった。又、記憶に新しいのが、あのコーラス大会。ベルリン・ドイツ合唱団を思わせる美声で他クラスを圧倒、一次予選で見事学年最高点を獲得した。（決勝戦は、青少年会館で見てのとおりである。）そして、又、当然（「タウゼン」と発音すると感じがでる。）というように、水泳大会で学年一位となった。しかし、表賞状の独占は、やめようということになり、以後、その約束は堅く守られている。

今年も色々な行事が、あったが、なんといっても忘れられないのが、修学旅行である。あの、美しく、可憐な、バスガイドさんに、男の子は皆、かりそめの恋に落ち入ったのであった。（学年を通じて、女の子が、運転手に恋したというのは聞いていない。）ほかにもさまざまなことがあったが、このころからであろうか、「愛」がないと言われていた8組にも春が訪れたのは。帰阪後、あちこちで愛の花が狂い咲いた。（筆者はツボミ。）

この一年に、より一層充実した8組。8組は、今、明日の日本の幸福を願って、日夜努力を続けている。さようなら、佐藤さん。バンザイ、田中首相。

クラス紹介

二年九組

二年九組といえば、まず、女らしい人一九名、男らしい人二十六名のことが、思い浮ぶ。私たちが、どのように一九七二年を送ってきたか、ふりかえってみると……。

組替えの発表を見にいって、九組は、なんとまじめで、おとなしそうなクラスかと思ったことか。四月になって、ふたをあけてみると、最初は、予想に反しなかったが、だんだん本性を現わしはじめた。六月になって、自治会祭のときに、それは、最高潮に達した。「夏祭」とかいって、河内音頭とかいうものを、中庭で踊ったのである。そのつぎは、十月の文化祭だった「転落」とかいう劇を講堂で上演した。

バレーボール大会は、いつだったろうか、男子九人制で校内優勝を成し遂げた。しかし水泳大会、体育大会では、両方あわせて、五人の決勝進出者が出ただけだった。バスケットボール大会は、男女とも不振だった。しかし、サッカー大会では、学年優勝を成し遂げた。

さて、九組を見回してみると、いろいろな人がいる。注目すべきことには、前・後期自治会常任委員会に、五人の委員を出している。しかし、学級内では、だんまり組が、大多数である。現状を実際より悲愴的に考えてつねになんとかしなければと考えている者もあれば、一度、ふられた恋人を友だちの恋人にと心配してやる楽天的な者もいる。他人に干渉されることをきらうのに、つねに他人に干渉する者や、他人からいわれないとなにもしない人もいる。いろいろな人が、いるからおもしろい。

さて、十月下旬に南九州に修学旅行で行ったわけだが、このときは、宮崎まで行き帰りは、船で、九州内では、バスだった。宮崎・鹿児島と約六百キロメートル、二十時間以上を、バスの中にいた。車内では、歌ったりガイドさんの案内を聞いたり、寝たり（大半の人は、この時間が、一番多い。）した。ここで、問題になるのは、ガイドさんである。九組のガイドさんは、大手前高校の旅行団に付き添った九人の中で、一番美人だとのことだった。そのガイドさん、青木敏子さんというのだが、さる十二月に大阪見物に来たのだ。クラスのある男が、青木さんと密かに連絡をとっていて、一六日に会うことになった。このとき九組の約半数が、学校までやってきた。ある先生などは、だれかスターが来るのかとお尋ねになった。

九組では、体育・保健・芸術・家庭を一クラスだけで授業を受けている。これなんかは、特典という方ではなかろうか。そして九組は、三一一番教室で授業を受けているが、隣りが音楽室なので、ときどき、楽しい音楽鑑賞会が催されることになる。夢心地で聞く音楽は、格別なものらしい。

これは、九組だけではないようだが、特別に仲のよい男と女との組が、いくつかできる。九組では、だれもうらやましいと思っていないようだ。

さて、修学旅行のときから、九組でもカードが、流行しだした。主なゲームは、ナポレオンだ。しかし、このことは、他のクラスからは、約一年遅れているらしい。廊下を通る他の二年生は、ものめずらしそうにながめていく。

最後に、九組の担任が岡田先生だったから、こういうふうでも、無事に行ったんだな。

クラス紹介

三年一組

☆序

勉強系クラス、医科歯科系理工学部クラスなどの異名をとるわが三の一は、その名の通り、恐ろしいクラスでございました。それを適確に示したのが、体育大会における「受験地獄」でございます。あの小学生でも解けナイ難問・珍問をスラスラッと解いてみせ（チマタでは、あてすっぽであったといわれる）、しかもあなた全問正解。みごと一位になったのでございます。その他、コーラス大会においては、四組・七組と連合で、みごと全校一位の栄冠に輝いたのでございます。〔スカス、運動諸大会では、全然ダメ。〕

☆本　題

こんな恐しいクラスでも、文化祭や遠足の後の二次会で、わりとホンワカとしたムードになったのでございます。そんな現在のわがクラスの様子を筆者の主観で述べるより、筆者の集録したアンケートの結果でもって、見てみたいと思うんでございます。〔合計四十八。足リナイ分ハ無答〕

その一、大手前での三年間は楽しかったか？　YES…30　NO…15
その二、食堂の食物は全般にうまかったか？　YES…9　NO…36
その三、高校入試は改善の必要があるか？　YES…29　NO…19
その四、大学へ行ったら遊ぶか？　YES…32　NO…14
その五、今すぐ恋人がほしいか？　YES…38　NO…7
その六、制服自由化に賛成であるか？　YES…27　NO…20
その七、自分で自分をカッコイイと思うか？　YES…15　NO…31
その八、大手前へ来てよかったと思うか？　YES…39　NO…7
その九、天地真理はカワイイと思うか？　YES…33　NO…13
その十、三年一組はいいクラスだと思うか？　YES…29　NO…17
その十一、信号の「進め」の色は青か緑か？　（青）……19　（緑）…24
その十二、二次会へ参加したことがあるか？　YES…38　NO…10
その十三、府庁食堂へ行ったことがあるか？YES…40　NO…8

☆結

左記資料をザッとながめるに、……という感じが強いネ。デワデワ。

☆追　伸

少し余ったゆえ、三の一の二十年後の姿を、筆者の主観で分析して見る。

。分析一　医科の部

ニセ医者　数名
殺し専門医　十数名
その他　残り全部

。分析二　理工科の部

爆薬専門化学者　一名
平サラリーマン　大ぜい

。分析三　その他の部

変り者専門弁護士　一名
吉本興業専属コメディアン　一名
「霧の摩周湖」専門歌手　一名
主婦（主婦は女の仕事）　ナシ
浪人　若干名

クラス紹介

三年二組

誰と誰が同じクラスになって、一年間を過ごすか、ということは、ある程度偶然的な組み合わせである。（筆者は組み合わせの計算など、とっくの昔に忘れさったのであるが……）そして、この奇跡的とも言える組み合わせによって、三年二組の教室に集まって以来一年、私たちは三年二組のクラスメートであると感じること稀にしてこの三年二組を終えようとしている。

自他ともに認める〝しらけクラス〟まとまりのないことこの上なし！良く言えば個性の強い人が多いのだそうだが……。「あー三年二組。なんやわからんクラスやネェ。」しかり！　この言葉が、そのまま我三年二組を表わしている。

＊　＊　＊

問題の多いことでも決して、他にはひけをとらない。職員室でも、問題になっているとか、いないか。

出席簿に雨をふらせる名人の多いのもこのクラスの特徴の一つ。アルバムにのせる写真を撮るのに、全員出席の日を待っていたが、とうとう実現しなかった、と言えば、その実態がわかっていただけるのではないだろうか。（あの写真屋さん、毎日毎日がんばったもんネ……。）

＊　＊　＊

やっぱり三年になると……と思いたくなる位、内職に余念がない。ある時間、ある先生が（この先生はめったに教室の中を歩きまわったりされないのだが）何を思ったか、机の間を歩きはじめた。と何やら物音が、パタパタパタ…と。その先生曰く、「ボクが歩くと急に何か物音がしますネ。」あー、大手前には何と寛大な先生の多いことか！

コンポの時間などは、けっさく。暗誦のとき、先生が本をめくれば、生徒もパラッと一ページ。まるで先生のあとについて英文を読んでいるかのごとく、先生のパラと生徒のパラは息があっている。その先生の言、「なんかみような音があるなァ。別にいっしょにめくってもらわんでもええねんでェー。」

＊　＊　＊

クラスマッチにおいても〝しらけクラス〟の本領を発揮して、ほとんどが一回戦敗退。毎回優勝候補にノミネートされながら、最後までその芽は出なかった。

＊　＊　＊

軽いタッチでクラス紹介をしてきたが、筆者はやはり残念に思うのである。どこでどうまちがえたのか、こんな〝しらけクラス〟になってしまったことを…。必死でクラス改善をもくろんだ者もいただろう。最初から、三年＝受験を考えてこの二組へはいった者も、途中で見切りをつけた者もいただろう。しかし、今こうしてふり返ってみて、やはり高校三年生という歌にも歌われる時期を、空しく過ごしてしまったことを残念に思うのである。クラスなどというものは、少数の者が動いて変わるものではない。みんなで、みんなの手で作っていくものなのである。

私たちは、クラスとして何か一つでもまとまるところのある二組というものを、作ることはできなかったのだろうか？

クラス紹介

三年三組

われは花

嫩草の穂にまさり
百鳥の囀る越え
われは花
春　萌す日に総し
よしや野の霜にかたく
世の風はげしくとも
われは花
燃えいずる陽に靫し

作者不詳

白雪姫の毒リンゴ（抜萃）

ああ　心一筋にうちこめる
そんな時代はないのです
おお　ぼくたちに今一番必要なものは
熱い恋や夢でなく
まぶしい空から降ってくる
白雪姫の毒リンゴ

門谷憲二

「3年3組へのメッセージ」

クラス紹介

三年四組

今年の三年生は例年になく？浮わついた学年らしい。その中において、抜きんでて浮わついていたのが、これから紹介せんとする四組である。

さすがに四月、五月あたりは、まだネコをかぶっていたが、自治会祭の「仮装行列」において、仮面は華々しくはぎ取られた。「白雪姫」から「仮面ライダー」まで、各々余りにも適役でありすぎた。これを我々は、六月革命と呼ぶのである。そしてこの頃から諸先生の模倣という遊びが流行し始めた。

文化祭となると、何ということであろう、おのこの大半は、大好きなフォークダンスも無視して「もぎてすと」とかいう儀式に参列したのだ。忍びよる受験戦争の荒波……。しかし、さすがに四組は偉かった。たび重なるテストにも負けず、ひたすら学年最下位を突走り、担任の、そう、あの「平野にこの人あり」といわれた近松先生を悩ますこと幾たびぞ。何しろ四組が学年平均を上回ったのは、ゲンコクと遅刻の数のみであった。

しかし（二回目）バレーボールとコーラス大会で、大手前を制覇すること二回！勢いにのった乙女たちは、先頃のバスケット大会でも学年優勝を遂げたのである。おのこの方々は、サッカー大会で実にペナルティ八回という死闘を演じた末、大惜敗したりで、逞しき女子に圧倒され、いつも教室の左隅にたむろし、細々と羽根つきなどやっておられたようである。

さて、四組の個々を見渡すに、余りにも多彩であった。容姿の方は、両性ともファミリー、ファミリーで納得しあっている。

英語の時間、全員が読み終わってから、おもむろに読み始めるという非常に落ち着いた人、サッカー大会で頭を打って死期を感じ、あわてて聖書を読み出した人、鏡がないため、とうとう三年間自分を「モテル」と信じて疑わなかった人、その他、高級和洋菓子店の御子息、米屋のムスメ、みなしごハッチから、女流落語家、「長屋のオカミサン」（これは誰であるか全くわからない）までもろもろの芸人が寄集まっていた。

しかし（三回目）つらつら考えるに、やはり少し浮きすぎたのではないか？もう少し深いところで結びつくべきではなかったか？笑い声は絶えなかったけれど、結局は、悲しいおとこと悲しいをんなの集合体にすぎなかったのではないか？など思うにつけ私はやや白い気持ちになるのである。

ともかく、一年間それなりに楽しかったと思う。色恋沙汰が皆無であったのは淋しいが、それもまた風流ではないか。

明日は土曜日、彼ら彼女らは、また私を退屈することのないギャグの世界に運んでくれるに違いない。四十六人＋近松先生の幸せを祈りつつ、拙筆をおくことにする。

クラス紹介

三年五組

五組の朝は早い。担任は、八時三十分のチャイムと同時に教室に現われ二回点呼すると、遅刻者など無視して去っていく。どこぞのクラスの担任のように、授業開始の四十分のチャイムの鳴り終わるまでお待ち下さったりはしないのである。にもかかわらず、我がクラスに遅刻者が少ないのは五組の性格のひとつである、真面目さの表われであるといえよう。

世界史と日本史の混合クラスなので、理科系の残り者のよせ集めなのかと思ったら、とんでもない。学年の平均点など軽くとびこえ、平口先生の介をかりれば、「理科系は半分浪人するんやけど、この組はようでけるから、もっと入りよるかもしれんね。」（あくまで仮定）とか。ただ残念なのは、歴史の時間は少数精鋭授業にもかかわらず、世界史組が選択クラスの平均点を上回ることができなかったことである。筆者が欠点をとったせいであるのは自明。すみません。江戸時代の有力な町民のことを、独立自営町民と解答なさるほど、世界史かぶれの方もいらしたに……。

さて、校内大会では、そのほとんどが準優勝という奥ゆかしさであったが、運動系クラスと対等にはりあい、中味の濃い試合であったと自負している。特筆すべきは、体育祭における彼女の活躍である。陸上部員が七人もいるというハンディキャップにもめげず、学年三位の優秀さであったのは、ひとえに、超特急とはりあったという、彼女のおみあしのおかげである。我々は、彼女がオリンピックで活躍し、テレビの御対面コーナに、御学友として出演する日を待ち望んでいるのである。

同じく、コーラス大会での功労者は彼である。指揮者としての彼の一面に心を奪われた女子から、一八五センチをこよなく愛する会が結成された。しかしこれは、合同した八組に本部があり、彼の所属する我がクラスには、特派員がひとりいたのみであった。やはり、他人の花は赤いのか？

忘れられないのは、後期の選挙のときの、はざま君を会長にする会、おおつぐ君を庶務委員にして、出席簿をとりに走らせ、彼を肉体美にする会などの暗躍である。その他にも、赤いくつべら友の会、松坂屋グルービーハンコ集め同好会などがあり、夏休みに一日十七時間勉強する会などという恐ろしいのもあった。

しかし諸君！　とかく陰険になりがちな高三のクラスにおいて、「平分けっけしような。」というある娘の言葉どおりの精神をもつ五組の存在は、貴重であった。誰かが、「この参考書、エーよ。」と言えば、みんなそろって買いに行き、休み時間には輪になって単語の覚えっこをし、散髪してくれば、「おはっ！」と頭をたたいてやるような仲の良いクラスなのだよ。女子は十四人しかいないけど、その穴うめをやってくれる男子もいるし、りっぱなママもいて、たとえ、食堂が十年ぶりの値上げをやろうとも五組のすべてはうまくいってるのだよ。四十九人全員の未来に栄光あれ！

ところで、今日は物理の平常考査なんだ。筆者は徹夜で、この原稿を書き上げた。ゆえに、追試は免れないだろう。新入生諸君、こんな先輩も、おそらくは、卒業させてくれる、寛大な大手前だ。安心して、やりたいことをやれ!!

クラス紹介

三年六組

我らが6組、様々コエコエ――××××××××××××××××××××××、のぐちかずゆき。前略、いつもニコニコ現金払い、中略祇園精舎の鐘が鳴る。後略。ほがらかで活発で人情味あふれる？クラスでした。一年間楽しかったわ。1年は5組2年は7組3年は6組、私逆向きに生きてきたのとちがうかな。大手前での三年間は楽しかっただけに、夢のごとく過ぎ去りました。皆様三年間不徳な私をこれまでにして下さってありがとう（TBS）スプリングに載せていただいて光栄です。ただ気がかりなのは、あの人と別れなければならないことであります。忘れようとして忘れられず、胸肖、鼻に残るはかのニオイ！くさい！楽しかったなあ。またあう日まで……。今になって振り返ってみて、いいクラスだったなあとしみじみ思えるクラス。三年間のうちで、いちばん楽しくて短かかったクラス。一筆啓上、火の用心、お仙泣かすな馬こやせ。いつまでも絶えることなくさようなら。バイバイ、三善英史はいい、バイバイ。バイバイ、三善英史はいい、バイバイ。私の心がさめていても、6組にいるとぽかぽかと暖かくなる。そんなクラス。中学と高校の違いを述べると、高校と大学との違いとあまり変わらないと想像している。大阪府立大の手前の高校に通ってはや三年いろんな事がありました。きたないババチイえげつないみにくいうるさいそんな楽しいクラスだった。風邪をひかないように気をつけましょう提供長谷川洋傘加工所。愛を求めてさまよう旅か、孤独をいやしてさすらう旅か、あいつがうわさの……。去っていくボロ校舎には未練なし。未練のこるはただアノコのみ。プレイボーイばっかり読むな！口ではいえません。男の子の名前を呼びすててバスケの応援をしたときのあのキモチ！とにかくほんわかとした家庭的なムードのクラスだったネ。ウン。深刻でなく、楽しいことが好きなクラスだから、高校最後の生活が愉快だった。夜明け、黄色の色鉛筆、あのボール、高倉健。クラス一番ののんき者より。どこへ行くのか、聞くだけやぼな、血の雨降らそかなぐりこみ。男健さん晴れ姿。雑草のように根強い男たちの集団、それが3―6。高校三年のよき日々を楽しくすごせた。浪人後もよろしく。各人が心の一隅に悩みをもっていても、笑いを教室に絶やさなかった……。長かったようで短かった大手前での三年間もやがて過ぎ去ろうとしています。楽で楽で、三年であることを忘れてしまうようなクラス。数学の実力テストが、話題になると、あきなかったクラスです？？？一致団結してよく学びよく遊び、運動会の応援歌で恥をかいたクラス。くだらねえ。くだらねえ。くだらねえ。でもどこか、おもしろいクラス。これでおしまいです。さようなら……いつか、どこかで……

三年六組（47±α）人でした。ごくろう

クラス紹介

三年七組

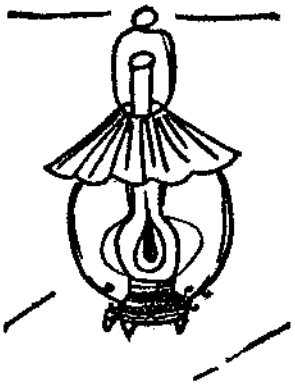
三―七の歴史は闘争の歴史である。勉学に励みたい者と、諦めたい者との闘争の歴史である。勝敗の決しない泥沼の闘争史である。

現在は、少しは、下火になっているが、ゲリラ戦は根強い。武器は主に押ぴんである。押ぴんとバカにする人があるかもしれないが、一部の軍事評論家の間では、パイナップル爆弾より威力が大だとの声があるのである。その威力は、特に心理面に於て卓越している。疑う人があるなら、六時間めの三―七をのぞくがよい。見れば信ずる。各人のほほは落ち、目は落ちくぼんでいるのだ。もっとも、訓練のおかげで感じなくなった人もわずかだがいることはいるのだ。

第二の戦場は、砂場である。そこに輪を作ればできるのである。サッカーの授業の合い間にすることになっている。ただし、ここでは、ひとり戦う前から勝負の決まってしまう男がいる。従って、彼にはゲリラ戦での報復が加えられるべきである。

もう一つ、最近開発された武器は、チョークである、別に投げたりするのではない。頭脳戦である。五つならんだら勝ちというやつだ。主に考えて詰めてゆくのだが、ごまかして突如、勝負の決まる時がある。その場合は、小ぜり合いがおこる。かけ声はイチニではなくシサン、シサンである。

闘争はかくの如くに、姿を変え形を変え、さまざまな形態をとって、私達の前に訪れる、しかし三―七の各人は、敢然とそれに立ち向かうであろう。いざ進め。栄光は近い。



クラス紹介

三年八組

時あたかも泰平ムードの中でぬくぬくとした日々が過ぎていき、もういつの間にか北風がコートの袖の間をくぐりぬける季節になってしまった。

ばらついていた集団が、クラスとしてはじめてまとまりらしきものを見せたのは、自治会祭で前代未聞、空前絶後などと評され、表題に反して汗だらけになった『納涼ほたる狩り』であった。この前日の夜更け、林立する怪しげなネオン街の中でアベックたちのいぶかしげな視線を一手にひきうけ、心には悲愴な覚悟を、手には虫捕り網と懐中電燈とを持ち、延々二時間半も歩きまわったと伝えられる二人の男の悲話を人は忘れてはならないのである。かれらはもちろん翌日のために、ほたるをつかまえていた、いや少なくともつかまえようとしていたのであった。ともあれ当日の入場者たちの表情にありありと浮かんでいたあの疑惑と恐怖とを筆者はいまだ忘れることができない。それあと、ほたるたちは巨人ファンの某先生の令嬢のおもちゃと堕し、その後の消息はたびたび古典の時間にその先生の口からことこまかに我々に報告されるところとなり、授業時間をつぶすのに少々役立ったようである。

続いて春先にはよくあることだが、三階から糸でぶらさげられたパンが落ちてきて卑しくもそれに食いついた連中がチョークを投げられて負傷するという残虐な事件が起こった。しばらくそれを観察していると、毎日のいろいろな弁当のおかずがえさになり、その家庭の経済状態などが楽しく理解され、そのためしばらく窓際の席はにぎわった。

二学期になるといろいろと名物人間が輩出した。メッテルニヒを上回る司令能力と卓越した人格を持つI氏は、後期総選挙では一躍会長に推された。あの選挙にウラで工作された不正選挙と見るムキもあるが筆者は知らぬ。数学という特殊部門では○○2世、またカゲの大人物としてY氏が話題を独占、この声色で注目を浴び、着用していると伝えられる『ヒョウのシャツ』は同好者の間では高値をよび、新しいブームをまきおこした。

トランプは大衆娯楽として根強い人気を誇り、ナポレオンはその隆盛を極め、男子の過半数は今だにその泥沼から抜け出すことができずにいるというのは嘆かわしい限りだ。女子の間にたいへんな人気を博しているものにH嬢の占いがあり、多分に神がかり的なものであるが、当たる!!といわれるとなんとはなしにそういう気になってしまうものである。筆者は今だに背すじの寒くなるのをおぼえるのである。

秋の遠足では、黒田先生が奈良の裏町のヘンな路地をウロウロと入っていき、そのあとをみんなでこわごわ、ぞろぞろとついていったそうだが筆者はよく知らないのであとは想像にまかせる。

最後に担任の先生（彼は清掃の先生ですぞ）と厚生委員の健闘にもかかわらず、我々は清掃を怠りつづけ、とてもじゃないが勉強できる環境を自らすててしまったことは遺憾にたえない。

――オシマイ――　Y・M

クラス紹介

三年九組

九月のある日、ほんのわずかの間に風が秋の気配を告げる様になっていた日の昼休み、Rの本から目を上げてまわりを見まわしてみた。まだきつい日ざしのせいだろうか、みんなの顔がやけにまぶしい。うれしくなってきた。やっと…そんな気持だ。とくに女子がすばらしい。アカぬけしててかわいいんだ。それにもう、とっても大人という感じなんだ。そう、これが九組なのかもしれないと思った。

大学への三年九組

卯　月…担任教諭を知って、びっくり
　　アイスクリームを目あてに雪印大阪工場見学（ガキなみ）

皐　月…バレーボール大会（こんなんあったんか？）
　　遠足（担任一人非常なノリ気）

水　無　月…自治会祭前代未聞の不参加までしてアチーブに備える
　　（結果？知るものぞ知る。）

文月葉月…やったでしょうねェ、おペンキョウ

長　月…水泳大会（オールラブの目標むなしくラッパ氏決勝へ）
　　体育大会（三年十組のプラカードのもとに入場）

神　無　月…文化祭（奇跡の参加！航空史の変遷と銘打ちグライダー・プロペラ機、ロケットを飛ばし、ついに九組科学の粋を集めた『羽ばたく飛行機』登場！また、フィイヤーの時には『鳥だ。ロケットだ。サンノキュウ！』と叫びサーチライトまでつけてロケットを飛ばすが積載量オーバーの為ガス欠…恥をさらす）
　　遠足（個別行動をとるカップル一組）

霜　月…大谷の理論『遅刻者の数と合格者の数は二乗に反比例する』がかなりの反響を呼ぶ。
　　これを受けて快一氏『九組改造論』を提唱、かなりの成果なる東京工大氏とのらくろ氏物教化において全学年の首位を争う。
　　避難訓練において消火液を頭からかぶるものあり。
　　（九組の名声不動のものとなる）

九組は平和の楽園でもある。チャップリンが『モダンタイムス』の中で求めようとしていたもの、それが九組にはある。しかし、我々もそう長くはこの楽園にとどまるわけにはいかない。アダムとイブがそうであったように、我々も入試という悪魔に禁断の果実を食べさせられそうだからである。そうして、我々のアダムは、我々のイブは我々の分身の中にとじこもりもう永久に地上には姿をあらわさないであろう。それでも我々は努力する。この言葉をたよりに…

努力して報われないものには救いがある。その救いというものは、長い人生のなかで芽生えてくるということを忘れないでいたい。

青春のひととき、全力をつくして努力することも明日の私達には必要なのである。

先生紹介

上総先生

上総先生は物理学の法則では理解しえない摩訶不思議な先生です。つねに計算尺を愛用され、その計算の速さは卓上電子計算機にも劣らぬと言われ、世界的な計算尺の使い手であります。

先生には奇妙な癖があります。すなわち、黒板に字を書いたのち、すぐに水道で手を洗うのです。それを知ったあるクラスの悪童連が、休み時間に水道のコックをペンチでしめつけ、そのうえ、石けんをぬったのであります。しかし、先生はあわてずさわがず、平然と言われたのです。「今日は水道がおかしいですね。」ああ、なんとおおらかなのでしょう。このような先生に教わることができるとは、我々はなんと幸わせ者なのでしょう。

先生の御邸宅は、近鉄の学園前よりバスに乗って数駅、駅から歩いて約四分のところにあります。建ったばかりの家で、非常に立派です。ホントです。胴ばかり長くて足の短い犬が一匹います。家では良きパパであり、奥さんと御子息と御令嬢が一人ずつおられます。

また、先生は、あの優秀な人間が数多くそろっている理研の顧問でもあります。そうです。理研はすばらしいクラブです。みんな理研に入ろう。とにかく、上総先生でなくては、あのやんちゃ集団をおさえることはできないのです。

みなさん、ムーミンが背広を着て眼鏡をつけて歩いている姿を思い浮かべてください。それこそ上総先生なのです。あの体つき、あの姿、あの第一印象、どこからどう考えてもムーミンだと、上流社会のもっぱらの噂なのです。中年のムーミンが眼鏡をかけて歩いていると驚かないでください上総先生なのです。

一つ書き忘れていました。先生の担当は物理です。そういえば、今日の六時間目は上総先生の物理の平常テストがあるのです。もう四時間目。あっ、あと十二分しかない。そろそろ物理の勉強を始めたいので、もっと書きたいことはいっぱいあるのですが、これにて紹介を終えさせていただきます。

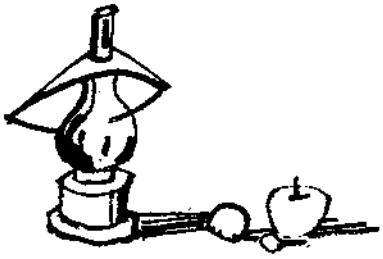
黒田先生

大手前のまじめな先生に二種類あって、はめをはずして下さいと言ったら、羽目板をはずしだす先生を後目に、それ以来はずれっ放しになってしまいそうな、そんな恐ろしい可能性を秘めた先生である。とはいえ、実際にそのようなことが起こるわけもなく、ただ、先生の話につられて笑いだした生徒が、笑うのをやめても、なおも顔を赤くしてうれしそうにからだをゆすっているあたりに、その徴候が見えるだけで、実生活においては、Mr・PANCTUALと異名をとる、きまじめな先生である。

コンポジションの時間、先生はアクシュウに生きる男となり、忘れた頃に、「天災は忘れた頃にやってくる」を暗唱させて、文字通りの授業をするかと思えば、ある日突然、伝統を破ってまん中から当てるなど、先生にこんな知恵があったのかと見なおさせ、「わかりません」とすわろうとするとANOTHER QUESTIONと、味な呼び止め方をなさる。外人の英語より聞きとるのがむつかしいという英語をしゃべる先生のおられる中で、先生の発音は耳に心地よく、それが人気の秘密でもあるが、「きょうは、ここまで」となかなかアクセントにうるさい一面も、持っておられる。

アチーブの英語の答案を返した後で、「入試の時、わからん単語があっても絶対あけといたらあかん。わからんかったら、そのままつめて書いといたら、ひょっとして見落として点くれるかもわからんけど、あけといたら、それだけで点ひかれるからな、とにかく、なにがなんでも、空白つくらんこっちゃ」と生徒が考えそうなことを、口に出しておっしゃるところに、親しみが感じられる。今の三年生が、一年の時に副読本として使った「あしながおじさん」発行には、黒田先生もお手伝いなさったそうだが、その中で妙に印象に残っているところがある。「木の下でリンゴを食べて食べて食べまくって、とうとうリンゴが頭に来てしまいました。」

黒田先生は、大手前の数ある超人的（？）な先生の中で、最も人間的な先生である。



中川先生

中川寒泉先生―いい名前だ。もっとも、この寒泉というのは号であり、御本名はと聞かれても、僕の知るところではない。僕等が先生から習っているのは書道。書道の先生であるわりには、肩書が少ない。これは先生が芸術界の裏面で行なわれる肩書き買収をきらうゆえんである。これからもわかるように、中川先生は正直というか誠実というか、そういったタイプの人らしい。しっかりした人生観のようなものも持っておられ、朝のH・RやL・H・Rや書道の時間に、少しずつ聞かせて下さる。以上が外観だ。

木館二階東南のはて、講堂の北隣にあたる部屋は「作法室」と標札？が出ている。しかし、それは名ばかりで、本当は二部屋にわかれており、一方はガランとしたほこりだらけの空室、もう一方こそは何をかくそう中川先生の根城となっている。知らない人は一度のぞかしてもらうといい。何なら話し込んでいってもいい。忙がしい時でなければ、先生は歓迎して下さるだろう。とにかく気持ちのいい場所なんだから！まず第一に畳がしいてある。これが、庶民の僕等にはこたえられない。正に大手前のオアシスという感がある。お茶あり、お菓子あり、ラジオあり、たくさんの本もあり…。床の間には、しばしば花も飾られている。そして、部屋中に漂う適度の墨の香。―何かおかしい。―そうそう、この文章は中川先生の紹介であって、部屋の紹介ではない。すっかり先生のことを忘れていた。先生の部屋について、もう一言つけ加えておくと、本当はさほどきれいには見えないということだ。その原因は、部屋の一部には先生の作品がちらかっていることがあり、しばしばモノクロームの抽象画を為すからである。そこへもってきて、僕の達筆による提出物が持ち込まれたりすると、部屋の雰囲気は完全に壊れる。

先生自身のことにもどる。住まいは奈良県の大和郡山だというお話で、お子さんも一人だか二人だか僕は忘れたがおられるそうである。朝は早く起きてお子さんと共に近所をマラソンされ、出勤も早く、八時十分頃には学校に来ておられる。地下鉄天満橋駅で乗り降りされるので、行き帰りがいっしょになる人も少なくないだろう。そんな時、先生は話しかけられるかもしれない。僕が見たところ、話し好きな先生のようだから。そしてもし、中川先生の性格が気に入ったら、どんどん仲良くなってしまえばいいと思う。きびしいところはないでもないが、決してつき離すことのない先生だから。必ず相手の身になって考えてくれ、話してくれる先生だから。先生は一見、他の先生に比べて、未熟で頼りなく見えるかもしれない。しかし、それは先生がまだ転勤してこられて二～三年しかたっていない為である。

中川先生は自然を愛し、芸術を愛しておられる。そんな大げさなものではないかもしれない。というのは、何も先生はストーブを廃止して落ち葉とたき木とで燃料をまかない、授業は全て北風の吹きまくる野外で行なえなどと叫んだりはしないからである。特に自然愛好家というわけではない。しかし、明らかに、自然に帰ることを望んでおられる。以上が中川先生の全てというわけではない。しかし、僕はもう満足したのでこれで終わる。

中塚先生

新入生のみなさんで、大手前の先生達がどうもいかめしくって、しゃべりにくいと思う人、そんな人は、いつも白衣を身につけていらっしゃる、中塚先生をみつけだし「先生！」と話しかけてみてごらんなさい。きっとやさしい笑顔で答えてお話ししてくださるでしょう。

この大手前高校に、中塚先生ほどおやさしくおもいやりがあり、女らしい（失言！）男らしい先生がいらっしゃるでしょうか？いや、いません。廊下で先生にお会いした時、おもわず頭が深くさがり、又困ったことがあった時は、「せんせー」と、なんでもお願いできる人物、それが中塚五郎先生なのです。とにかく何を頼まれても〝NO〟とおっしゃったことは、ないのではないでしょうか。

先生の専門は化学で、その道二十年とか。筆者は、残念ながら、どこでどうまちがったのか、先生には地学しか教えていただいたことがないのです。地学の授業といえば、スロースローテンポでしたが、本職の化学ではそんなことないでしょう。（と私は信じているのですが…）

最近のニュースをひとつ。先日行なわれた教師陣対生徒のバスケット大会でのことですが我が尊敬する中塚先生は、体育科の諸先生と若さあふれる先生方の中で、真白な体操服に身を包まれ、汗をいっぱい流して活躍されたのです。試合を観戦していた人はきっと脳裏に深く残っているだろうあの瞬間！　そうです、中塚先生がみごとに一本ゴールを決められたのです。館内は拍手のうずとなりました。「先生カッコイーー！」涙を流して喜こんだ女生徒は何人いたでしょう。

先生が音楽好きなことみなさん知っていますか？　御自分でフルートを吹かれるし、吹奏楽同好会の顧問でもいらっしゃいます。

浜口先生

その一

美術と工芸はどちらも浜口先生です。またの名をマグチといいます。ハマグチのマグチです。更にマグマチック、ライオン先生などもあります。

背は高くてすらりとし、白髪をオールバックにしておられます。口はおちょぼ口、メガネをかけていて、目はきらりと光っています。

授業風景を公開します。チャイムが鳴っても、生徒はなかなか集まりません。五分くらいおくれます。だから出席をとりおわるのが五分おくれます。それでもおくれて入って欠課でないのに欠課になる人もあります。授業の内容は、工芸は（二年生）難問または＊印に相当します。だから数学と同じようにがんばらなければなりません。授業はきびしく、生徒がサボれば注意されますし、赤点もつけられます。

しかし先生はきびしいだけの人ではありません。授業中もたのしく創造の喜びをより深く感じます。授業以外のときは大へんやさしくおだやかに話しをされます。生徒のことを真味に考えておられます。

つい先日、食堂の値上げがありましたが、先生は生徒と食堂の間に入って調停の役目をひきうける立場になられて大へん苦労されました。諸物価値上がりの今日、値上げは止むを得ないとしても、生徒の要望をくんでかなり折衝されたとのことです。生徒の味方・浜口先生！

その二

大手前高校に長くつとめておられる先生は多くおられますが、浜口先生もその一人で、数十年の大手前の歴史や伝統や、変遷をよく知っておられます。だから最近の生徒のいろいろの風潮についてもかなりきびしい御意見をもっておられます。しかし、現代の青年の気持も理解しようと努力されています。その点では、若々しい気持をもって居られる先生です。美術部の顧問をして居られますが、部員の描く抽象画（何を何でかいたかわからないような画）にも理解（？）をもって居られるようです。

先生の御趣味は、黒石白石を並らべるゲームの高級な方（囲碁）で噂によれば本校の名人だそうで、他の先生が浜口先生の御指南をうけているとのことです。好きなのはアルコール、これは誰でもかも知れませんが、かなりお強いとのことです。

先生は、朝早く来られます。いつもチコクしそうな生徒は先生から早起きのヒケツを教えてもらうべきでしょう。

いつも元気で、学校を休まれることは殆んどありません。早おきのためだと思います。先生に負けないように、無チコク無欠席でがんばろう。

浜田先生

とにかく一言で言うと、先生は「授業がすべて」といったかんじなのです。いかにも生徒に物理学（先生の授業はまさしく〝学〟に値するものです）を教えるのに生きがいを感じておられる様子で、授業はていねいかつわかりやすく、いえ、誰でもきっとわかるもので、我校一の名先生（平先生といい勝負）なのです。時たま（あれはなんと体育大会の日だったではないですか）、片手に鉛筆、片手に「傾向と対策、物理B」なる、筆者のような二年生には恐しくて直視できないようなものを持って、廊下で三年生に教授なさっているのを見かけるときもあるのです。これだけでも、先生がいかに熱心であるかが、うかがえようというものです。実際、先生に物理を習えば必ずや現役で合格できる、というわさもあるほどで、四月の始業式のあと、物理を先生に教えていただけると知った筆者は、涙を流して喜んだのでした（が）。

それではこのあたりで、先生の授業風景を紹介しておくのが、スプリング誌における真理でありましょう。きょうの第一声「じゃ、諸君、この前の四十八番をやります。」この四十八番というのは、前の時間に配ったプリントの問題の番号なのです。先生の授業の魅力のひとつがこのプリントにあるということは、習った者でなければわからないのです。人より早く物理教室に行くとこの問題の答案を黒板に書かされるので（先着順に指名されるという意味）、我々はぎりぎりの時間にかけこみ、そのため常に三分以上の貴重な時間が浪費されるという欠点もあるのですが、（小野先生に比べれば何てことない、という声もあり）このプリントにより応用力がぐんとつくことは、疑う余地がないのです。十分ほどでプリントをやり終えると「じゃ、諸君、教科書にはいります。」時間は残り少なくなるのですから、先生の授業はかなり忙しいのです。黒板の前を右に左に走り回り、我々もそれについていくためずいぶん苦労するのです。一度聞き始めると、五十分間（三分必ず延長）息もつけないので、特別な事情のある人は、五十分をまるまる無駄にしなければならないのです。次に忘れてはならないことは、先生の授業では、英単語の学習が物理に並行しておこなわれる、ということです。物理に必要な単語をすべて、新しく出てきたときに英訳するのです。そしてそのときに、英単語学習に欠かせない、接頭語や接尾語、反意語などを教えて下さる、というしくみなのです。教室を窓からチラッとのぞいただけでは、いったい物理をしているのか、英語をしているのか部外者にはわからないのです。

そんなわけで、先生に教えてもらっている我々は、非常な幸せ者なのです。不運にも幸せ者になれなかった人には、先生の課外授業にもぐり込んでくることをお勧めします。先生は、見慣れない顔をみつけると、よろこんで指導（指名）して下さるでしょう。

福島先生

「福島先生」ってどんな先生なのでしょうか。紹介を頼まれはしたものの実は私、ちっとも知らないのです。まずお年。あの知性的な広さのおデコからみて四十代かしら。否、それでは顔がつやつやし過ぎだわ。じゃ三十代？否、あの朗々とした声の若々しさを思い出してみて、では二十代。いいえ、あんなに中学生の面影が残っているのよ。そうか十代なのね。…こんな具合で十代に落ち着くのですが、それでは私の常識が許しません。同様にして、家族構成、ご趣味、眼鏡をとった素顔など、生徒として知っているべき事柄を何も知らないのです。

とにかく、授業のみから知り得た福島先生を紹介してみましょう。

第一に、非常にやさしい先生です。といっても、大手前には平先生を筆頭に、やさしい先生ばかりがおられるので、余りに平凡な表現ですよね。しいて言えば、生徒に対して非常に情け深いのです。例えば、クラスのある者が奇妙な古文の読解をしたところで、決して間違っているとおっしゃらない、すなわち、不備な解答を一生懸命善意に解釈なさり、他の生徒にかなり推敲した解答を伝えて下さる、ということなんです。だから、たまに度を過ごした答えが出ても、「そうですか、残念ですね。」と、気の毒そうにおっしゃるだけです。生徒が恥をかかないよう、心を配っておられるのでしょうか。否、あれは人格の為せる技です。人間が終生かけて到達すべき境地に、生まれながらにして立っておられるのです。

第二に、とても楽しい授業をなさる先生です。あの低く快い声で「六条の院とは、源氏が奥様方を収容しておられた所。」などとおっしゃると、限りない古典への愛着を覚えます。やはり、先生の国文学への愛情からくるものでしょう。

第三に、一つの信念を持った先生です。これは、余りに一方的な見解かもしれませんが、テストを返してもらうたびにそう感じるのです。授業中やさしい分だけ採点をきびしくなさっているのでしょうか。しかし、これもきっと、人格からくる愛の鞭なのです。

と色々と書きましたが、あの独特の敬虔な態度は、文字ではとても表わせません。そうそう、こんなお話を聞きました。先生はいつも列ごとに当てられるのですが、当たると知りつつ寝ていた生徒があったそうです。すると、先生曰く、「あ、寝ておられますか。では次の方…。」全く感動します。以上のこと、某氏からの聞き伝えで、真偽の程は分かりませんが、私の知る限りでは、このような伝説が生まれてしかるべき先生です。

思えば　福島先生を師と仰げるこの学校に席をおけた私達は、しあわせ者です。だから、先生の努力を無にしないよう、私達生徒は、ほんとは一生懸命お勉強しなきゃならないんです。分かっていますか？

とにかく、先生の栄光と、大手前高校国語科学力の向上を祈ってやみません。

伏見先生

この名を知らない大手前生なんてまずいないだろう。保健体育科六人衆のおひとりであり、また一方、三―二の担任でおられる。

12がつ○日・8じ32ふんH・Rに入室。ひとりひとりの名前を読みあげ出席をとる。8じ40ぷん退出。この八分間に教室にかけ込む者総勢約20余人。きょうも出席簿はカラフルだ。そして先生の悩みも大きいのだ。

教室内においては、温厚・実直・情深い普通の先生なのだ。三の二全体と先生とのつながりを持つ機会は至って少く、先生の生い立ちや学生時代はいまだに知られていないのだ。

三の二は、自由奔放な性格のため奇行とみなされた行動が多くあつたため―けれどそれ自体は純真無垢な動機ですすめられたんだが―トラブルが多く発生し大いに先生を困らせたものだ。その中で、ぼくたちも先生の一面を垣間見た気がしたんだが、結果はまだ？のままなのだ。口数の少なさと温和な人柄のため、一部では多大に誤解されているようだ。本当のところは、まだまだ謎の部分が多いのだ。即席の印象でもってながめることは禁物なのだ。腰をすえて見ることだ。先生の後ろに隠れうごめいているものを見つけだすことだ。でも先生と話し合うのをあきらめることは禁物です。それは未来の生活において、互いを誤解する原因になります。ぼくたちも一度真剣に話し合ったことがあったけれど、うまく話がかみあわず、とうとう先生の本当のところを聞きだすことはできなかったのです。今それが悔恨となっているからです。

クラスは楽しき中にきびしさあれ、それがぼくらの望みだったのです。残念ながら今までの先生の努力とはうらはらに、ぼくたちは、みじめな悔恨の気持ちをいだいているのです。これがぼくにできる先生紹介です。

おわり。

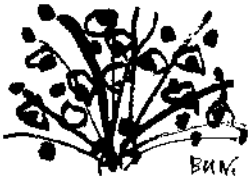
松本先生

松本次郎、この名は、大手前卒業生の三分の一は、知っていると思われる。教えた生徒の中には、阪本先生も渡辺先生もいらっしゃる。松本先生は、授業にはいる前に、ときおり昔話や家族の話を、聞かせてくださる。二年間のその話の集積に基いて筆を進めることとする。

先生は、昨年、還暦を迎えられたから、明治天皇崩御の年、現在の福井県大野市に生まれられた。中学校のときから、数学の成績はよかったようで、鹿児島市内の中学を振り出しに、佐賀県立佐賀中学、大阪府立北野中学を経て、昭和二四年の学制改革による、大手前高女と北野中学との交流で、大手前高等学校にかわられた。その時からずっと大手前で、教鞭を取っていらっしゃる。鞭で思い出すことは、先生は、佐賀時代は、できない生徒を鞭でたたかれたそうだ。いまのやさしい顔付きからは、想像もできないことだ。先生は、現在、高槻市に住んでいらっしゃる。お子さんの一人は、航海士だそうだ。そして、もうお孫さんが、何人かいらっしゃる。先生は月に一度、コマ劇場へいって頭を休められるそうだ。

さて、遅くなったが、先生は、数学の先生で、四十年弱の教鞭歴の持ち主である。先生は、幾何学が、お得意のようで、解析幾何の問題を初等幾何で解いて見せられたり、射影幾何の手ほどきをされることもある。そして、高校程度の二次曲線の問題を初等幾何を用いて解く研究をされて、府から賞金を受けられたそうだ。実際に授業を受ければすぐわかることだが、かなり高程度のことまで、授業中に話をしてくださって、いろいろな参考書にのっていることは、ほとんど網羅されている。数学は、毎日、授業があるから、先生と毎日顔を合せることになるが、教壇に立つときは、いつも違ったあいさつをされる。そして、授業中の独得なことばつかいとともに、生徒たちの人気をかっている。先生は、授業時間が余ると、三分間問題とか、宿題とかいう問題を出題される。この問題は、松本先生だけのもので、一般に公開されないもので、先生に受け持ってもらった学級だけ、教えてもらえる。先生は、一年生は、みんなまじめに勉強する上に、あまり差がついていないというので、一年生を教えたいといわれている。しかし、どの先生も考えることは同じようで、ままならないようだ。ついでに、先生は、整数論にも興味を持たれている。何でも目標は、「松本の定理」を発見することであるらしい。

さて、今年から数学の教科内容が変わるので、そのことを話されたことがあった。内容は、やさしくなって、「または」や「かつ」についてしっかりと勉強するということだ。それで、今でも新課程に備えて、ことばの使い方に留意されている。先生は「みんな数学できたら、世の中うまくいかない。」といわれた。心の休まることばである。



赤い鋏

杉野としゑ

師走というのに妙に暖かい。今日は十二月八日、第二次世界大戦がその緒を開いた運命の日である。爾来三十余年、ルパング島等に余燼いまだ消えず、霜夜に心疼くこと一再ならずの昨今である。思えばその日、わたしはこの大手前（当時は女学校）に、卒業期近い毎日を過していた。

わたしの大手前生活は、迫り寄る日華事変（日中戦争）の軍靴の音に明け、世界大戦緒戦における戦勝気分と滅私奉公の国家的要請の裡に暮れる。従ってその回想は鈍く重たいものであるほかはなく、あるいは、怒涛狂乱の昭和史が、その一面をあなた方の先輩の上に如何ように具現したかを、ご紹介することになるであろう。ただ、今は多く故人となられたわたしの育成者に、多少とも触れざるを得ないことを心苦しく思うのである。

元来、質実剛健の気風が強かったわたしたちの学校は、静岡県下の中学校長から転じたばかりの意気旺んな校長を戴き、府下でもいち早く時局の急を自覚して、急速に非常体制を敷き、それを着実に実行して行った。まず、最初の夏休みの直前、突如断髪禁止令が下った。―と言ってもすぐには理解しがたいと思うが、おかっぱ頭は軽佻浮薄の嫌いがあるゆえ、伸ばして紐で束ねよとの絶対的お達しである。この夏休みの課題にはかなり抵抗を感じた者がいた。他校にはまだその兆しがなかった頃であった。休み明けの検査という時、伸びきらない毛を無理矢理くくったねずみの尻尾は滑稽とも悲愴ともみえた。同じ九月、玄関わきに一つの記念碑の完成をみた。今は昔、明治二十年、時の皇后の行啓を忝のうした光栄を胆に銘じ、戦時における女子教育の精神的支柱としようとの意図であったろう。以後入門、出門の度に、之に最敬礼を失してはならないのであった。すでに将兵は大陸の山野に御国のために戦っている。もはや、教育の目的は、知識の吸収に貪欲であってはならない。ここで「徽章の精神」に関する校長訓話を披露しよう。「三角形の各辺は、知育・徳育・体育を現わす。就中、体育はその底辺をなすものであり、…後略。」某校のように逆三角形ではないのが誉である。かくて、体力作りを根幹とする全人格教育を達成すべく、翌年には正課に「作業」なる時間が加わり、京阪沿線の大和田の学校農園に出向いては土を耕やし、草を取った。大手前公園等の清掃も、滅私奉公の精神の形象化であってみれば、けっしておろそかにできないのであった。

その間にも、外国排斥の思想は日増しに強く、外国文学はご法度になった。折も折、「風と共に去りぬ」が大流行していたが、先生の眼を盗んで鞄にひそませて来る女傑は驚異的な存在であった。毎朝の全校朝礼では、明治天皇・昭憲皇太后の御歌を、校長先生の後に続いて奉誦して聖代を偲び、精神を引きしめ、遂には、訓話に、「ルーズベルトはベルトがルーズなのだ」「アメリカでいうゼントルマンとは紳士、猿（申）であります。」というユニークな戦意昂揚論も飛び出すに到るのである。そしてもう一つ、最も特色ある事柄にふれるならば、東京一中から購入したとかいう五十挺の銃を用い、学校教練が始められたのである。退役大佐の指導はきびしく銃は肩に食い込んで痛かったが、「中国の娘子軍のようにしようというのではないが、規律秩序を教え、服従心を養い、指揮統率の力を養うものゆえ、女子といえども必要」と、高い調子であった。さすがに遠来の参観者は後を断たなかった。

どうやらわたしはあまりに一面的な回想に引きずられてしまったようだ。

ここで眼を転じるに、新入生を最初に喜ばせたものは、各教科の教室が個性的だったことである。教室は教科ごとに集団をなしていた。従って生徒は一時間ごとに各室を巡回していくわけだが、室に表情があり、いかにも新来者を歓迎してくれている風で心がわくわくした。国語室には一人一人の机に大字典か、広辞林かが入っており、英語室にはコンサイスが備えてあった。隅には書架もあって、休み時間にはは自由にそれらを取り出し退屈しなかった。同じ教科内でも、当該教室の責任者の先生の個性が机の配置や本棚の中味まで変えていて、いかにも教授者と密着している気分があった。学校の中心、講堂にも多くの歴史があるが、ある日、土井晩翠氏が来校され、話をされた。校長先生の恩師である。「思い出すことども」という題であったと思うが、話の後で、最上級生が荒城の月を斉唱してお礼に代えると、「そういう日もありましたかね。」と感慨深げであった。老文学者の厚みが胸にこたえた。ある日は、当時第一線の国文学者久松潜一氏を迎えた。「大阪と国学」と題して、ゆかりの契沖を中心に訥々と話され、かえって興奮した。そういう喜びを与えられた大手前はよいところであった。

思うにわが学園には元来自由と独立の精神があった。不幸それは特異な時代の潮流にぶつかって、犯されはじめ、形骸化の一途をたどりはじめた。母なる大手前はそのような印象とともに、わたしの中に眠りつづける。

何年か前、某新聞社が高校進学の手引き風の記事を掲げるに当り、取材に来校した。卒業生の立場で面接したわたしに記者は聞いた。共学で昔の美しい校舎が汚されるのが惜しくはないか。どう致しまして。学園のいのちを生贄として磨いた廊下(実に糠袋で光らせた)に何の美があり、何の愛着があろう。若い記者はわたしの回想のカクテルの味を知らぬ。それを知るのは入学以来随伴してきた、半ば落剝した赤い裁縫鋏ただ一つである。

回想記

平　正人

回想記を書けといわれておどろきました。私がそんなに老人にみえるのでしょうか。でも、教室で生徒の顔を直視出来なかった新任の時から「鬼」と呼ばれる今日まで、……成程、ずいぶんになります。それにしても、大手前の現役ですので、その回想記は困ります。とすれば、大学卒業までということになり、これでは生立ちの記となりますが、それでゆきましょう。

生れは、石川県松任町。加賀千代女の生地です。「朝顔につるべとられてもらい水」の句の、つるべの井戸水か、もらわれた水なのか――ともかく文学的に由緒ある水で、産湯をつかったそうです。

アレルギー体質なので、寒さで湿疹になります。ミイラみたいに、全身繃帯にくるまって、長い雪国の冬をしのぎました。家族は「冬眠」とよんでいました。字が読めるようになったのは何時頃だったか。幼稚園にゆく前には、「主婦の友」の連載メロドラマを耽読していたのを覚えています。炬燵と、木枯しの中の汽笛、ヒロインのさし絵と。

幼稚園に通いはじめると、満州で戦闘がはじまりました。陸軍士官学校で、終戦をむかえました。純粋な戦中派。女系家族に育ち、父の転勤で住居も定まらなかったせいで、(小学校を六回変りました。)男の子の友達は皆無。壁を相手に何時間でもキャッチボールをするという特技は、こうして身についたものです。中学校では、ターキーという名の英語教師に

（すぐにおこって顔面に朱がかって、冷静になろうとして蒼白に、それでついたあだ名でした。）毎時間教室から追放されたのが思い出です。

士官学校では、弱兵の典型。たのしい思い出などありようがありません。それに、いずれの学校も正規の課程を了えていないので、卒業式を知りません。母校もないし、同窓会も。中学校の同窓会名簿では、戦死となっています。強いて母校をということになれば、大手前高校。なにしろ二十年になりますから。

戦争しか知らない私にとって、平和や自由は、なかなかなじみ難いものでした。それでも気をとりなおして、進学しようとしたら、軍学校生徒の入学制限にひっかかってだめでした。この時の相手が、過日米国から帰って来た、東大数学科の大川氏だったのですから、まあ当然だったのでしょう。翌年も勿論理科を志望しました。何しろ宇宙物理学者になるつもりでしたから。ところが受験場の同じ番号の席に他人が座っています。私の席は文科に。願書を提出してくれた友人が、独断でかえてしまったのです。めんどうなので、入学後も転科せず、そのまま、もっとも、食糧難で、停電つづき、試験もうけられないと、試験反対のストライキばかり印象に残っていますから、どちらへ行っても大差なかったのでしょう。映画がみれて、野球が出来て、平和とはいいものだと感じていました。

さて、大学は、印度哲学を専攻する予定でした。どういうわけか、父の蔵書にこの種のものが多く、友達が噂を広めて、本人もその気になっていました。どこの学校にも、早とちりの先生はいるものです。私の文学部志望を、英文科志望とかんちがいして、「入学出来たら、逆立ちしてみせる。」と。本人はすこぶるなっとくしていたのですが、級友達が憤って、参考書をかしてくれるやら、声援してくれるやら。初志を再びまげて、英文科に進まざるをえなくなりました。おかげで、大学の三年間は五里霧中。全く英語で苦労しました。しかし、原書を求めて、古本屋を歩きまわって足が鍛えられ、一冊買うために、数日肉体労働をして、体力がつきました。学問の成否は体力にかかっていると悟って、大学を卒業することにきめました。以上、戦争・偶然・他人の意志等が、本人の意向とは全く無関係にきめてくれた運命のようにも思えますし、一方、こう回想してみると、大手前高校英語教師、硬式野球部顧問になるべく、産湯以来着実に進んできたようにも思えます。勿論、悔はありません。カミユの影響でしょうか、二者択一して、その後は、ふりかえらないと、高校時代から生き方は変っていません。（このあたりでやめたいのですが、与えられた原稿用紙は、まだ半頁以上あります。どうやら、是非とも書かせたいことがあるような）

それでは、最後に、諸君のもっとも期待している、恋愛の回想を。初恋は幼稚園に入る前年、メロドラマを耽読していた頃です。対象は、筋向いの庄屋の娘、名前は忘れました。むろん幼稚園には、お手々つないで連れていってもらいましたが、間もなく、寒いと言っては休み、おくれそうだと言っては泣く私に愛想をつかしたようで、これは失恋。爾来、小学校の転校毎に、対象をかえて、それがいつしか習い性となって、年々、新しい対象に恋愛をすることになってしまいました。士官学校時代の僅かな空白期を除いて、三十数年、従って三十数回。最後の恋愛を除いて、他はすべて結果的にみれば失恋ということになるのでしょうか。

◆クラブ紹介

空手道部

ぼくが入学して間もない頃のことですが、空手道部がこの学校にあるのを知ってびっくりしました。こんなおとなしい学校に……と思ったのですが、中学校時代から空手に憧れていたぼくは、空手道部にとびこみました。みなさんの中にも幾人かは、いや男なら誰でも一度は空手に興味を持ったことがあると思われますが、今でもその興味を持ち続けている人なら、誰でも入部を歓迎します。但し、空手を習ってケンカに使おう、などと考えている人は遠慮して下さい。仮にそういう人が入部したとしても、考え方を変えない限りおそらく1ヶ月ともたないでしょう。空手はみなさんが想像するよりずっと素朴なスポーツなのです。

その素朴なスポーツを今までぼくはやってきたのですが、この頃になってやっと空手の奥深さというものがわかってきたような気がします。自分の出す突きが、あるいは蹴りが、なんとスピードがなく力不足であるかと落胆するのです。空手を練習し始めた頃よりも、今の方がわからないことが多くなったような気さえします。

しかし、去年の一年生（つまり新二年生）が入部してきた時には、彼らはみんなぼくよりも背が高く、体重もありそうでしたが、なんとか弱くたよりなさそうに見えたことでしょう。こんな時、ああ、やっぱり一年間しんどいめしてきたかいがあった、と思いました。こんなことを言うぼくも実は入部当時はたいへんひ弱でチビな一年生だったのですから。ちなみに161cm 50kgでした。今は164cm 57kgですが、体重7kgの増加は筋肉がついたからだとひたすら信じています。なにしろ信じる者は救われるのです。ですからあなたも今、空手を信じてみませんか。

本当に空手というスポーツは志す者を裏切りません。その人が空手に執着している限りは、例えばテニスなどは、かなりセンスを必要とするらしいですが、それとちがい空手は努力したその分だけ自分にかえってくるといった感じです。うれしいとは思いませんか。

こんなことがありました。一般人との合同練習の時のことです。しばらくの間、ぶっ通しで組手（実際に相手と突き、蹴りの応酬をする練習）をしていたので、手にも力が入らなくなり、息も切れてきました。しかし、大手前高校空手道部を名乗って練習している以上弱音を吐くわけにはいきません。何クソ!!と思って突きを出します。そうすると、そういう自分に我ながら感激して（おろか！と思わんで下さい）もう息の苦しいのも痛さも忘れて練習するのです。実はその練習後、帯もほどけないほど腕がマヒしてしまったのですが、その痛さは痛さではなく、むしろ喜びであったと思い出されます。こんな気分わかってもらえますでしょうか。

さて、ずいぶんと勇ましいことを書いてきましたので、どんなすごい練習をするのかと思われる人があるかもしれませんが、高校生の範囲を越えるようなことは絶対にしません。ですから、真剣に練習している限りにおいては全く安全なスポーツなのです。事実ぼくは二年間やってきて、骨折はおろか、鼻血すら出したこともありません。

とにかく、空手に興味を持っている人は、ぼく達の練習を見に来て下さい。金曜日を除く毎日、講堂か大阪城で練習しています。そして、空手の正しい意味を知ろうとする人の入部を歓迎します。

◆クラブ紹介

柔道部

柔道とは、衆知の如く世界で最もポピュラーな格技ですが、単なるスポーツとしてこれを見ていたりすると、時々その戦闘力に驚かされる事があります。試合等は、その好例でしょうか。

さて、我が大手前の柔道部及び部員の紹介ですが部員数は10～20人の不特定多数でコンシストされ、顧問は河崎先生です。

（大阪の柔道界での先生の顔の広さは驚嘆に値します。）

我が柔道部もかつては、大阪にその勇名をとどろかしていたそうですが、現在はその落日の栄光を追い求めています。（とはいえ、今年になっての対外非公式試合は5勝2敗、公式試合は3勝2敗。）今年は一年生が多数（？）入部し、それが猛者ぞろいだった故か、北野を含む、ほとんどの公立には我不敗を称しているのです。

特筆すべきことは、夏休みの合宿です。今年は何と、信州松本の北、白馬岳で合宿練習したのでした。それは、花園高校、淀川工業高校と合同のものでしたが、なんせ涼しいし、エサはいいし、先生、OB、警察官とりまぜて10数人のコーチ陣は完璧に近かったしで、かなりシンドカッタけどすばらしい（?!）5日をすごしたのでしたよ。思うに、この合宿の後柔道部に一つの和（輪じゃない）ができたのです。先輩、後輩のしきりがなくなり、団結力が増大し（特にテスト時）実にいいムードをつくりだしたのです。

現在、柔道部は帯の黒白、学年の上下に関係なく、個性を尊重する柔道をめざし将に和気藹々の中で練習しています。

部員紹介　敬称略

。F氏—外見よりずっと穏健派。主将。その日もさめる様な後腰は部内で特に有名。また体育時に2人の素人をしめ落とした人。

。K氏—柔道部らしくない顔つき、スタイル。めんどうみが好評。

。O氏—柔道部らしい体つき、顔。いつもブツブツいって練習する。

。Y氏—一年前の合宿時に、事もあろうに畳の上で紙くずと洗面器をもやした男。—理由—「火が何となく見たかったから」—奇人。

。Y氏—家が理髪屋さんのせいか、頭が丸坊主なのです。背負いが得意。

以上現二年生五人衆、以下一年生九人衆

。T君—生粋の柔道人。払腰が有名、医者の息子。あだ名タマさん。

。I君—柔道部一の巨人。足長は最高。顔つきは柔道部らしくない。

。E君—筆者。正体不明、支離滅裂、五里霧中、五十歩百歩。

。C君—アクロバットは学年一。軽妙な動きが注目される。

。M君—腕相撲で相手の骨を折った男。その意味では危険人物。

。H君—小兵ながら不敗を誇る。外見よりやさしく面白い男。

。S君—Hと同様小兵だがその腰の強さは評価が高い。

。N君—最もきれいで、切れあじのよい柔道をすると評判の男。

。O君—努力型。その強引な体落しは相手にきかなくても好評。

それから、マネージャーのA、T、Tの諸嬢の貢献（夏にはカルピスを練習後用意してくれた）に感謝しつつ駄文をとじます。

なお、入部希望者はいつでもよいから放課後道場へ。筆者の信ずる所、柔道部はあらゆる意味で最高だと思います。

◆クラブ紹介

登　山　部

登山は古代においては、そのほとんどが宗教と結びついて発達してきました。我が国最高峰の富士山、木曽の御岳山、立山、高野山などがその例です。しかし、近代的なスポーツやレクレーションとして登山が行なわれるようになったのは、比較的最近のことであります。すなわち、我が国では明治の中頃に英人宣教師ウォルター・ウェストンによって、日本アルプスの紹介がされてから盛んになり、日本アルプスをめざす人は年ごとに増えるようになり、今日に至っているのです。

我が大手前高校登山部もその中の一つでありまして、一昨年は北アルプスの槍ケ岳（海抜三一八〇メートル）、昨年は南アルプスの塩見岳（海抜三〇四七メートル）・日本第二の高峰である白根山北岳（海抜三一九二メートル）と三〇〇〇メートル台を着実に歩み続けてきています。

こんなふうに書くと、登山部って恐ろしいクラブで入部なんてするとしごかれて死んじゃうかもしれないって思う人がいるかもしれません。でもそんなクラブじゃないんです。欲求不満の者やおもしろい者の集団です。例えばこんな人がいました。名前をN氏とでも言っておきます。N氏はある山道を最後尾で歩いているうちに生理現象をもよおしたんです。そこでN氏はリュックサックを降ろして草むらの中で用を足しました。ここまでは、なんだなんにもおもしろくないじゃないかと思う人もあるでしょう。問題は次に起こったんです。N氏はリュックサックをかついで、来た道を歩き始めたのです。つまり、用を足しているうちにどちらへ行くのか道を忘れてしまい、反対に歩き出したということです。全くばかな話だと思います。そしてまた、我が登山部には「雨男」という者がいます。彼と一緒に山へ登ると一度は雨にたたられるのです。その「雨男」とは何をかくそうこの私であります。だから私は山へ登るとみんなからいじめられるのです。（かわいそうだなあ……影の声）

また登山部というクラブは先生と生徒との隔たりがあまりなくて、先生なんて年上の友だちって感じなんです。一緒に食事をし、テントの中でいろんな話をしながら寝るという具合だから、そんなふうになってしまうのも自然と言えば自然であるかもしれません。

話は変わりますが、私はある人から「君はなぜ山に登るんだ。」と尋ねられたことがあります。その質問の答えとしては、G・H・マロリーの「山がそこにあるから。」という名言があります。でも私としては、その名言はあてはまりませんでした。私はその答えにこまりました。なぜかと言うと答えようがないからです。こんなことを書くと、目的もないのに山に登るのかと言われるかもしれませんが、そうじゃないんです。山に登ってみてからその目的を捜そうと言うのです。山に登ってみて、清々しい空気を吸い、そして汗を流して無心に歩き、そしてみんなと楽しく騒ぐ。その中から山に登る目的を見つけ出すのです。すばらしいことだと思いませんか。私はすばらしいことだと思います。あなたも少しでもすばらしいことだと思ったならば山に登ってみませんか。

◆クラブ紹介

ラグビー部

東西南北とグランドの各部分でサッカー、陸上、硬・軟式野球、ソフトボールが練習している。その中を、ところせましとあばれまわっているのが我が愛するラグビー部である。大手前はややもすると冷たい冷たい共同体である。その中にあって、暖かい何かを持ったワンパク集団がある。それこそまさしく、楕円球を追っかけてグランドをつっ走る、ラグビー部員である。

苦しいにつけ、悲しいにつけ、うれしいにつけ共に苦しみ悲しみ喜べる仲間である。君はあの夏の太陽の下で汗を出しつくし、体力のすべてを発散して練習した後の、あのさわやかな快い充実した気持ちを味わったことがあるか！君はクラブが休みの時のあの何か不満なむずむずした気持ちをかみしめたことがあるか！　君はあの試合の際の興奮と感動を感じたことがあるか！　ないやろ、ざまあみろとかあるのかゴメンとか言いたいのではないのです。ちょっとギザッてみただけなのです。ラグビーの試合は15人でするのです。(相手チームと審判を入れると33人)ですから、他のスポーツよりはるかにチームプレーが重要となり、勝敗さえも決定します。これは、個人の心のつながりや犠牲的精神が基盤となります。ですから、ここに真の友情が、男の友情が生まれるのです。話しが少し堅くなりましたが、ここにラグビー部(二年)の年中行事を一つ紹介しましょう。我クラブはたいへん団結が強いのを特徴として、皆で何かをするのが大へん好きなのであります。毎年11月8日には我ラグビー部が誇る世界の〇才M氏の「イモパーティー」を催すのです。これはその日の昼休みに食堂で関東煮のイモを皆で彼に御馳走して、M氏の誕生日を祝う会なのであります。

こういったこととクラブの練習は別である。クラブが持つべき一種の厳しさがもちろん存在する。しかしそれは恐れるべきものではなくて、身が引締まるといった感じのものである。そう、クラブの時には雑念は消えうせるのである。そして共に汗を流す喜びを感じるのである。入部早々自己紹介をして、初めはただ練習の仕方を覚えてついてゆくだけに懸命となり、ようやくマスターできかかると高度な技術の追求へと目標が変わり、そうする間に夏が来て、無我夢中で頑張ると秋が来て、ようやく試合が分ってきて、一段とうまくなったことに気づいて喜ぶのである。さわやかな空気となる頃、いくらやってもバテずにいることに感激するのである。そうした中で3年生が引退して、自分の肩の上にずっしりとした重みを感じて一段と練習に精を出すのである。初試合に感動し、練習の中にも試合を想像するのである。冬が過ぎて春が来て、陽気のよさもあってクラブが大へん楽しくてたまらなくなるのである。これがクラブの一年である。学年や季節ごとにぶちあたる壁があり、それを乗り越えてゆくのである。こうしたことをくり返すうちにラグビーを愛し、離れがたくなるものを感じるのである。地面をけって後ろへ遠のけ、空気を肌に感じながら、グランドを右へ左へと走りまくり駆けまわる、そのスピード感に酔うのである。

何だかラグビー賛歌といったようなものになってしまったが、我輩にはこれ以外に我クラブを表現できないのである。

現在部員数—27名　秋に全国大会、春に近畿大会・国体などがある。

◆クラブ紹介

音楽部（O・M・C）

本館の南のはし、府庁側の階段をトコトコと、3階まで上り、音楽室の前の廊下をさらに奥へ奥へと押し進むと、クラブ長屋にまいります。そして、グルーッと見わたすと、ひときわ目立つ、さわやかと言うかあでやかと言うか、つまりその、壁・扉を問わず、ピンクの濃淡で塗りたくった部屋があるのがわかります。これこそ、私たち音楽部が、真夏の雪にも負けず（天井のペンキがはげ落ちてくるのです）日々の地震にもめげず（床板が抜けかけているのです）、音程の狂いはピアノのせいにして、ひたすら練習に励んでいる部屋なのです。

さてここで、昨年一年間の我クラブの活動の模様をふり返ってみますと…。まず四月、諸君たち新入社員が入部すると、新入生歓迎会を盛大に催します。これで諸君たちは初めて、このクラブの言葉では言い表わせない楽しさ、部員たちの人間的な暖かみ、そして羞恥心をかなぐり捨てすばらしい声をはり上げて歌うその度胸に接するわけです。六月にはいると早くも、年間最大行事である文化祭の準備にとりかかります。夏休みには、キャンプに行くこともあります。そして2学期になると文化祭。昨年は、第一部（午前）に校歌と組曲「蔵王」、第二部（午後）には「OMC愛を歌う」のテーマを掲げ、ショー形式のものをやりました。第一部は、マイクロフォンのセットを失敗し、第二部の方は練習不足で、両方ともあまり感心したできばえではありませんでした。しかし私たち部員全員の心には、私たちがモットーとする「一つの心」という言葉の意味が深く刻みつけられたように思います。そして今、「今年こそは、」と部員ひとりひとりがやる気十分になったことは、大きな収穫だと思います。そしてこの後、和気アイアイムードでクリスマスパーティを大々的に繰り広げ、年があけると大阪府高校連合音楽祭を控えて、ひたすら練習に励むのです。

我クラブの雰囲気は、明るいホンワカムードです。その中にも音楽をやろうという意気がいっぱいではちきれそうで、部室がガタガタなのもそのせいだというウワサもチラホラ。（ホンマカイナ）

そして諸君たちを待つ、現在約四〇数名の部員たちは皆、品行方正、学力優秀、容姿端麗、眉目秀麗（主観的観測含）性格も素直で優しい（コレハホント）おにいちゃん、おねえちゃんばっかしです。そしてOBにも、すばらしい人がたくさんいて、文化祭近くともなれば、差し入れ（これだけをすばらしいと言っているのでは決してない）を持って指導に来て下さいます。

最後に、我クラブにはいるには資格がいります。それは。「歌が好きであること」です。これは入部の際の必要十分条件であります。従って歌の上手下手は決して関係ないことをここに特筆しておきます。（そうでなかったら筆者などはとっくの昔にクビになってるハズ）

練習日は、月水木曜。月謝＋人生相談料＋家庭教師謝礼＋マージャ…いやトランプ実戦コーチ料＋ノドの薬（＝アメ）代、全部含めて月五〇円。エッ！（あまりの安さに今さらながら驚いているのです）

それでは、これでさよならということになるわけですが、可愛らしいピンクの部室のスタインウェイのピアノは、いつでも諸君たちを待っているということを覚えていて下さい。いざ音楽部へ！

◆クラブ紹介

美術部

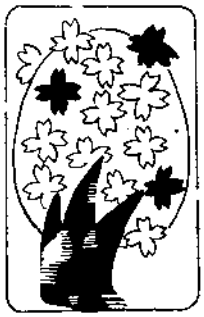
どういうわけか『書く』ことになってしまった。もともと『書く』なんて面倒なことは僕の性分じゃないんだけど、だが、だ。17年も平和に生きてると、なんだかヒョイッと気まぐれをおこしちゃって、我が愛すべき美術部のため、ヘンテコリンな使命感に捕われて、一筆やらかそう！というわけなのだ。それでもって、文章は支離滅裂、いきあたりばったりに鉛筆を泳がせよう？ってんだから、みんな、ガマン、ガマン……。

だいたい、僕が美術部に入ったのも、いきあたりばったり、全くの偶然みたいなものなんだ。去年の5月「ワァー。大手前に入ってやったゾ！」気分が、まだまだぬけていなかった僕は、ボロい学校の中を物珍し気に、それこそ毎日ほっつき歩いてたんだ。それでさ、靴箱の陰の黄色い戸からガラッ！ていう音と共に表われたノッポ君に、腕をガッシとつかまれ、連行されるみたいに中に入れられちゃって、むせるようなテレピン油のにおいにクラクラしながら、アソヨアレヨっていう間に美術部員になっちゃったというわけ…。アレヨアレヨで入っちゃった僕だから、なんとも自覚薄の美術部員ができあがったわけだけど、しかし、だ！その「アレヨアレヨの僕」でさえ途中でおん出たりしないで、今もって美術部に籍を置いているっていうこの驚くべき事実に、注目してほしいんだナ。

つまり僕みたいな奴にさえ、グッとくる所のあるクラブなんだヨ、美術部ってのは……。だいたい、雰囲気が抜群に良くって、クラブていうよりファミリィっていう感じなんだ。壁でも椅子でも、なんでも赤ペンキをペタペタぬりたくっちゃうY子、逆立ちしたままスプライトを飲みたいというK君、「ブリジストンって、どんな紅茶？」というM子、あまりフィーリングが良いので、天使様も〝負けた〟といった？T君……と、構成も変化に飛んでいて？生物学者が舌なめずりするような変人の宝庫。だから、絶対飽きないヨ！一度入ったらやめられない、ナンカスッポンみたいな、カッパえびせんみたいなクラブなんだ。

エッ？芸術はもっと神聖なものだって……？そんなこと言ってる君こそ、このクラブに入って洗脳される必要大だゾ。僕にとって、「絵を描きたい」っていうのは「たこ焼きが食べたい」っていうのと、少しも違わない。どっちも同じように、切実で、ささやかで、あたりまえなんだ。

だから、いつもいつもマジメにお絵かきしているより、相当にズッコケてだべっちゃうファミリィ的クラブの方が、ずっとずっとイイ！イイ！って、思っちゃうんだけどな。なんだか最後に、いつもふざけている弁解をしちゃったみたいだけど、トニカクいいクラブなんだヨ。一度遊びにおいでよ！ナ！（テレピン油のにおいに酔っちゃってるT）



ブラスバンド同好会

新入生の諸君、御入学おめでとう。今はうれしさでいっぱいだと思う。そこで、このスプリングの「ブラスバンド同好会」の紹介に、少しつきあってもらおう。

まずは、同好会というものについて深く認識してもらうために、生徒手帳「クラブに関する付則」及び「同好会設立について」の項を読んでいただきたい。頭脳明晰な君達のことであるから、同好会というものが、決して活動内容が劣るとか、そういうたぐいのものでないことが理解していただけたであろう。

さて、同好会の生い立ちを客観的(?)に話そう。我同好会が設立されたのは、君達が中学一年生の春のことである。既成のクラブにあきたらず、未知の物を求めて、S先輩を先頭として、五人のメンバーで活動を開始した。当時、学校には楽器などもちろんなく、楽器屋を捜し回って『なんとか鳴る楽器』を手に入れて練習を続けた。とはいっても、たった五、六人では普通の編曲ではとても演奏できず、自分達で手を加えて演奏可能としたのであった。そして、その年の秋の文化祭には、はやくも青少年会館で演奏をし、その驚異の進歩には、だれもが目をみはった。(と先輩は語る。)その後、二月の予餞会では、三年生から飛んでくるおかしを、バスのF先輩は見事にその楽器で受けとめ、大手前史に残る超美技を披露した。さらに君達が中二の時には、メンバーは十六名に達し、飛ぶ鳥をも落とす勢いで発展した。君達が中三の時には、新入生十三名を加えて、より充実した自治会祭、高校野球の応援、体育祭、文化祭を終えた。そのあまりの高度成長ぶりは、故池田首相も「よくやってくれた。」と涙を流して喜こんでくれたという。今やその演奏は、ベルリンフィル、ウィーンフィルと並び世界三大音楽拠点として、幅広く活動している。「今年のブラバンの活躍が楽しみである。」とは、全前高生の一致するところであろう。

この三年間には、又いろんなエピソードが盛り込まれている。発足当時楽器の置場がなくて、無理いって物理準備室の端っこへ置かせてもらっていたこと。練習中に、故意か過失か、指揮者の振っていたタクトが、手をすりぬけてこちらへ飛んできたこともあった。そんな時、部員一同笑いの渦中にいたこと。冬の寒い日の朝(いわゆる朝練)大阪城で吹いていると二羽のアヒルが「ガーガー」と近寄ってきたこと。去年の九月、初の校外演奏をしたこと。数えればきりがない。

こんな同好会なのです。何かいいクラブないかな、と思ってここまで読み進めてきた君の心は、今はっきりと決まったはずだ。我同好会に入会せずして、どうして高校生活をエンジョイできよう。楽器などはいつでもどこでも吹けるものであるが、この若々しい、情熱に燃えた部員と交わって練習できるのは今をおいては存在しない。さあ、我々と、大手前史の新しい一ページに落書きをしょう。入部者の大半は初心者ですし、女子も男子とほぼ同数で活躍しています。毎日の放課後、一の几の教室(プール横)で練習しているので、見学結構、どんどん来たまえ。

終わりに際して、このスプリングのスペースを、我同好会のために譲って下さった、これも満足のゆくクラブ、硬式テニス部の方々に深く感謝したいと思います。

修学旅行によせて

佐野富士弥

修学旅行に行くとなると歌詞の一つも覚えておかねばなるまい。まよったあげく買ったレコードの中に「風のささやき」というのがあった。〝くるくるまわるよ心の風車……みなすべてがまわる走馬灯　あのまぶしい夕日の輝やきも　あの真夏の浜辺の足音も　あなたと旅をした雪山も……やがては消えて水のいろ〟

ときにふれ旅行したいと思う。分厚い時刻表をひっくり返して考える紙上旅も楽しい。でも具体的になると汽車賃、旅館代等の経済と日・行程、家人の体調等で、ユメからさめるのである。そんなに無理して行くことがあるだろうか。旅に何を求めているのだろうか……。

修学旅行も度々問題になる。昔に比べ旅行はしやすくなっている。車であちこち行ける。テレビなどでわかっている。皆贅沢になって強行軍や粗末な食事や宿をうけいれない。修学の内容があるだろうか。業者による観光旅行にすぎないではないかなどなど。

しばしば黒板とチョークによる授業は全く時代遅れに思われる。実際、テレビやテープ、計算機等の機械を使った授業が研究されている。優秀な人が秀れた教材を選び立派な内容で指導にあたれば効果があるに違いない。がしかしと思うのである。"人と人とが向いあってやる"時間がほしい、それを欠いては生きているとは思えない。非能率的な面、無駄な時間がたとえあってもしかたがないと思う。一見無駄な時間や旅行もあった方がよいのではなかろうか。

先日、法事でお坊さんのお話を聴く機会があった。「何が仕合わせかといえば長生きするほど仕合わせなことはない。」「いろいろなものを見、聞き、考え生きる。生きるということは何なのか、どういうことなのか。」「外人は常に座右に死をおき、死をみつめて生きている。日本人は死はないものと遠くへおいて生きている。」「昔は心を大切にした。米一粒捨てなかった。物一つ出来る迄のみんなの苦労を思いやった。食べてすぐ寝ころばなかった。今はビーフ味。ウシウシ。米粒捨てたけど目つぶれへんやないか――」

ボクも心を大切にしなければならないと思った。

波に絶えず洗われ、傾いていた砂岩・泥岩互層や鵜戸の海食崖

どんよりした雲の下にあった都井岬と鉄色の海

雨上りの朝見た長崎鼻からの開聞岳、美しい緑の樹々の色とハイビスカス、冲天をついた桜島の噴煙（打砕かれた岩＝火山灰）

やわらかい陽ざしをあびてねていた霧島観音……そしてそこにいた人々や動物

それらに何を感じただろうか。

ボクは常々、心が一時に一つの所にしかおれないことを悲しく思っている。あの山とこの里とに同時にいることが何故できないのだろうか。

（S・47・12・18）

新二年修学旅行

片山龍夫

昭和48年度の修学旅行の計画は新2年生が入学してまもない昭和47年5月頃から始められた。400人の集団が旅行するので，宿舎にも，交通機関にも色々制約があり，出来るだけ早く予約することが有利であるからである。例年の如く，南九州・北九州・信州・東北方面のモデルコースを示して，生徒の希望調査をした結果，北九州方面に決定した。6月中頃の事である。ここしばらくは北九州方面への修学旅行は行われず，信州方面へ連続3回と，47年度は南九州へ行ったが，また北九州へもどったわけである。北九州のコースは大体，別府・阿蘇・熊本・天草・雲仙・長崎とそれに秋芳洞が加わったもので，ややいそがしいものであった。時には長崎・天草を抜いてのんびりとまわることもあった。

この学年の担任には「修学旅行アニマル」や「何でも見てやろう」という先生がいて，必ず今までと違った旅行を計画するそうで，最西端の地平戸と臼杵の石仏と昼の瀬戸内海を組み入れた案が最初に出来た。しかし色々検討した結果，交通機関に難点があり，昼の瀬戸内海や臼杵の石仏は案から消えて行き，とうとう後に記す様な案に落着いた。

この案の特長は①日本最古の貿易港として栄えまたキリシタン殉教のロマンの地，更にホテルの食事が修学旅行では味えない程よいという平戸へ行く事。②往きは昼の特急で，鉄道の夜行は使わない。従って九州でホテルに3泊する事。③復路に瀬戸内海の超高速豪華船フェリー（夜行・7000トン級）を使う事である。

第1日目

1班大阪駅8時6分—(特急かもめ)——佐賀…(バス)県立公園川上峡温泉泊。2班新大阪駅8時30分—特急こだま—岡山—(特急つばめ)——久留米…(バス)川上峡温泉（1班と合流）泊。

第2日目

川上峡温泉発…武雄…佐世保弓張岳…平戸口（フェリー）平戸〔午後平戸観光資料館・松浦史料博物館・平戸城・光明寺等見学〕平戸泊。

第3日目

平戸発　平戸口…佐世保…西海橋…長崎市内〔大浦天主堂（日本最古のゴジック建築物）・グラバー邸（我が国最古の代表的洋館・このあたりはエキゾチックである。歌劇マダム・バタフライの場面を思わせる）原爆爆心地・国際文化会館（原爆資料見学）〕…雲仙（紅葉が美しい。地獄見物）…島原泊。

第4日目

島原発　フェリー　三角—熊本水前寺公園——阿蘇山中岳登山—山なみハイウェー（阿蘇山と共に九重の雄大な景色が楽しめる）——別府（夕食）—刈川　大洋フェリー

第5日目

大阪南港……学校にて解散（午前9時頃）

案は大体以上の通りで，見学場所も多種多様で，自然も変化に富んでいる。修学旅行を実り多いものとする為，ひまがあれば，歴史的，地理的，文学的，地学的，等色々の面から事前に調べておいてほしい。

編集者（雑感）

平山栄一

文化部長であるからといって書かなければならない理由はないのです。別に書くのがいやでこういっているのではない。編集者自ら筆をとらなければページを埋め尽くせないのです。そう、それだけみんなのスプリングに対する関心が薄いのです。記事、原稿を募集しても自主投稿はわずかに一人。そもそもスプリングとは大手前自治会唯一の機関誌であり、自治会員、全員の力によって作られるべきもので、その代表として文化部が編集するのであって、あくまでも主体は自治会員であるのです。その主体である自治会員が無関心では、文化部、とりわけ直接編集にあたる二～三人がいくら編集に奔走しても、数年前から問題となっている、スプリング発行の意義たるものを尽くしえるはずがないのです。もちろん、この自治会員の無関心さはスプリングだけではないのです。自治会発足時において、すでに問題となっている。自治会員の自治会に対する、無関心さ、自治会崩壊の一途をたどっていることこそ、その自治会員の無関心さが原因となっているのです。大手前生、いや今の若者、社会人にもいえることですが、自己が直接属する集団つまり、内部集団への異常な関心と、それに対する外部集団、つまり自治会あるいは政治への無関心さ。このような問題の中で自治会の本来あるべき姿への再建化などとは、とうてい無理な話であり同様に、スプリング発行に際して、その意義を十分に果しえるはずがないのです。自治会の問題にしろ、スプリングの問題にしろ、数年来、多くの有志たちが叫んできたことであり、ここで、ひとり相撲をしても、むなしくなるばかりでしょう。しかし、スプリングの編集にたずさわった以上、何かの役にたちたいと思い、そこで、過去十数年のスプリングを紐とき、その歴史、流れをつづってみたいと思うのです。それによって、みなさんのスプリングに対する理解が少しでも深まれば、それで、この記事の役目は充分に果されると思うのです。

「春」のように生々とした「泉」の如く新鮮で「躍動」のように力強くを基本精神に、十二年前スプリングは創刊されたのです、そして、それ以来、座談会、アンケート、クラス紹介、クラブ紹介、先生紹介などを軸として、その当時の大手前あるいは社会の風潮を反映した内容を記載してきました。第三号はすでに表面化している例の自治会問題を取り上げている。第五号は高校生活というものを深く追究した記事が目立ち、校長先生との座談会において、「灰色の高校生活」あるいは、「高校予備校化」という問題に率直な意見が示されています。第六号には、このころ（一九六六年）エスカレートしはじめた、ベトナム戦争へのアンケート、あるいは、自治会員の積極的な投稿による文芸作品。あてつけに俳句の一句を挙げておこう。『酷暑にてグランドの烈光我を射る』これまでは自治会本部と文化部が一致協力して、スプリング編集にあたっていたようですが……。

そして、第八号、ますます悪化してゆく自治会問題をアンケート、座談会意見欄にとりあげ、その問題に積極的に対処していた様子がうかがえます。第九号、もちろん、これは学生運動をとりあげ、先生と率直な意見をかわしている。第十号はマンネリ化のスプリング打開へと、小さな革命をおこしています。そして、十一号、十二号ときて、この第十三号、これこそマンネリ、そのものだ」、「スプリング発行の意義から逸脱している。」といわれるかもしれません。でも、これだけは信じてほしいのです、この世知辛い大手前高校の中で編集一同、精一杯この十三号編集に、努力したことを—

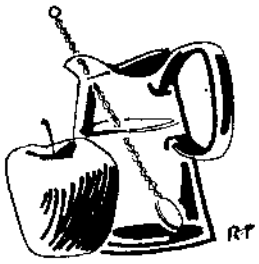
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

編集者雑感

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

木南　敦

私が、かかわったスプリングは、十三号でもう三号目です。かかわったといっても、十一号は、ただ読んでおもしろいなと思っただけだった。十二号からは、原稿を書くことになった。このときは、先生紹介を書いたが、いまから考えると、ひどいことも書いたなと、ちょっと、反省している。十三号になると、編集まですることになった。というのは、前期の文化部長をしていたので、後期の部長を選ぶときに、平山君にむりやりにおしつける形になってしまった。それで、編集のおてつだいをすることになった。

いざ編集ということになっても、なかなかいい考えなどは、浮ぶものではない。まあいままでのを参考にして、一応の考えがまとまった。原稿の内容が、決まると、いろいろな人に原稿を依頼することになった。みなさんは、おいそがしい人が、多いので、なかなかうまく集まりにくい。やっと集まった原稿でも、よみにくい字などが、かなりあって、辞書をひきひき、読むことになる。みんな、漢字をしっかりやってくださいといいたい気持ちだ。

さて、文化委員という役がらは、他の委員と比較すると、わりと閑職の部類ではなかろうかと思う。私は、一年からずっと文化委員をやっているけれども、こういう理由だけでやっている。しかし、どうまちがったのか、去年の前期の文化部長になった。それから、私だけは、閑職でなくなった。文化祭、自治会祭など各種行事に、こきつかわれて、夕方おそくまでのこることもたびたびだった。スプリングの編集は、おもに頭をつかうが、行事では、からだをおもにつかった。どちらも、かなりきつい仕事だった。